

# 3.11

● 東日本大震災

## 宮城県建設業協会の闘い9

未来のために  
震災を  
忘れない

未来のために 震災を忘れない  
3.11 東日本大震災

宮城県建設業協会の闘い9

一般社団法人 宮城県建設業協会

 一般社団法人 宮城県建設業協会

安波山から気仙沼湾と市街地を一望。三陸沿岸道路の一部、「気仙沼湾横断橋」は2021年3月6日開通を目指し、舗装や付属施設の工事が進む(2020年10月21日撮影)

# 3.11

● 東日本大震災

## 宮城県建設業協会の闘い⑨

未来のために  
震災を忘れない

東日本大震災の津波で、

甚大な被害を受けた東北の沿岸部。

復興道路は全線開通が間近となり、

復興の象徴とされる橋の完成が迫る。

人々は日常の暮らしを取り戻し、

まちには新しい賑わいが生まれつつある。

あれから10年。

地域建設業は、

震災直後から復旧・復興を担い、

さまざまな自然災害とも向き合いながら、

地域の再生のため尽力してきた。

そして今、震災をもう一度振り返る。

より安全・安心で魅力ある、

地域をつくり・守るために。

#### 気仙沼湾横断橋

青い海、青い空にひときわ映える白い橋。震災復興のシンボルとして、また気仙沼の新たなランドマークとして、静かに開通の時を待つ。気仙沼湾横断橋、2021年3月6日供用開始予定（2020年10月21日撮影）

## 大震災を風化させることなく、教訓を伝えるための活動の展開と情報を発信していく

### 発刊のあいさつ

一般社団法人  
宮城県建設業協会

会長 千葉 嘉春



東日本大震災より10年、リーディングプロジェクトとして進められる「三陸沿岸道路」の宮城県内総延長126km全線開通や「石巻南浜津波復興祈念公園」の開園が、令和2年度内の予定とされ、まちには新しい賑わいが生まれており、海岸防潮堤など引き続き整備が進められている状況もありますが、着実に復興への歩みを進めております。

一方で、全世界的な新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、あらゆる経済活動が影響を受ける中で、地域の医療や物流、生活等に支障を来すことのないよう、維持管理を含めた社会インフラの整備は、地域建設業が感染防止の必要な対策を講じたうえで、工事施工を進め、停滞する経済や雇用への貢献も非常に大きく、地域の基幹産業であるとともに地域の守り手としての重要性・必要性を再認識しているところでもあります。

また、激甚化・頻発化する自然災害が全国各地に甚大な被害をもたらしている昨今、令和2年度までの「防災・減災、国土強靱化のための3ヶ年緊急対策」も、来年度以降5年間で15兆円の国土強靱化施策が閣議決定されたことは、未来への投資であるとともに、被災地宮城県の発展に向けた復興の後押しとなることに大きな期待が持たれております。

当協会でも、東日本大震災を教訓に協会組織としての防災対応力強化のために、様々なツールを備え、各管理機関との連携を図り実地訓練等を定期的に実施するとともに、「豚熱(豚コレラ)」や「鳥イ

ンフルエンザ」等の家畜伝染病が全国的に急拡大する中で防疫への備えにより、令和3(2021)年1月に角田市内養鶏場での「高病原性鳥インフルエンザ」防疫対応による埋却作業等を担うなど、さらなる地域の安全・安心の確保に努めております。

コロナ禍にともなって取り巻く環境も経済・社会システムに大きな変化をもたらし、5G・AI・クラウド等のさらなる活用による政府挙げてのデジタル・トランスフォーメーション(DX)の推進がその原動力として期待される等、地域建設業にも大きな変革が必要とされておりますことから、やりがいや誇りと魅力ある産業づくりに向けたこれらの取り組みを加速させるとともに、令和元年東日本台風災害も含めた東日本大震災からの早期完遂への活動を展開して参る所存であります。

東日本大震災の教訓を学ぶための震災遺構や展示施設を結んだ震災伝承施設をネットワーク化する「3.11伝承ロード」の活用も進められておりますが、この大震災を風化させることなく、教訓を伝えるための活動の展開と情報を発信していくことが当協会の役割であることを強く認識し、このたび節目となる10年に震災記録誌第9弾を発刊致しました。

最後になりますが、大震災直後より、各方面よりご支援・お励ましを賜り衷心より御礼を申し上げますとともに、記録誌の作成にあたりご協力を頂きました関係各位に対しまして厚く感謝を申し上げ、ごあいさつといたします。

### 発刊に寄せて

宮城県知事 村井 嘉浩



宮城県建設業協会並びに会員の皆様には、未曾有の大災害である東日本大震災からの復旧・復興のみならず、平成27年の関東・東北豪雨や令和元年の東日本台風などの度重なる大規模災害についても、昼夜を問わず応急・復旧工事に御尽力いただき心より感謝申し上げます。一方で、世界的な新型コロナウイルス感染症の流行が国内外の経済に深刻な影響をもたらし、公共工事においても現場の一時中止などの影響が生じる中、建設現場の「三つの密」の回避に向けて様々な取組・工夫を実践しながら社会基盤の整備や維持管理に取り組み、県勢の発展と安全・安心な県民生活に多大なる御貢献をいただいておりますことに重ねて感謝申し上げます。

さて、まもなく東日本大震災から10年が経過し、今年、新たな県政運営の指針である「新・宮城の将来ビジョン」の初年度を迎えます。復興需要の収束、地域経済・社会の持続性の確保、大規模化・頻発化する自然災害への対応のほか、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行といった時代の転換点に直面する中、その先にある宮城の明るい未来を描いていくことが求められています。このような状況を踏まえ、「新・宮城の将来ビジョン」に掲げる「宮城の将来像」の実現に向けた施策を着実に実行する必要があり、土木・建築

分野においては、今後10年間の社会資本整備の基本理念や行動方針を定めた「宮城県土木・建築行政推進計画」の取組を推進するほか、人材の育成・確保や働き方改革に取り組んでまいります。

今回が第9弾となる本震災記録誌は、大地震の教訓を後世に的確に継承していくためにも、また、建設業に携わる人だけでなく、これから建設業を担っていく若者へ建設業の重要性と魅力を伝えることにも活用されることを期待しております。

県としても、震災伝承施設のネットワークにより地域の防災力向上や活性化を目指す「3.11伝承ロード」とも連携を図りながら、引き続き大震災の教訓の伝承と風化防止に努めてまいります。

結びに、貴協会のますますの御発展を祈念いたしまして、発刊に寄せてのあいさつといたします。

# 一般社団法人 宮城県建設業協会

昭和20(1945)年3月に日本建設工業統制組合宮城県支部として設置し、昭和24(1949)年1月に宮城県建設業協会が改組・創立。宮城県に本社を有する約260社の地域建設業で構成。協会本部を仙台市青葉区に置き、沿岸部に面する5支部、内陸部の4支部の計9支部で組織。平成25(2013)年4月から一般社団法人に。平成31(2019)年1月には改組・創立から70周年を迎えた。

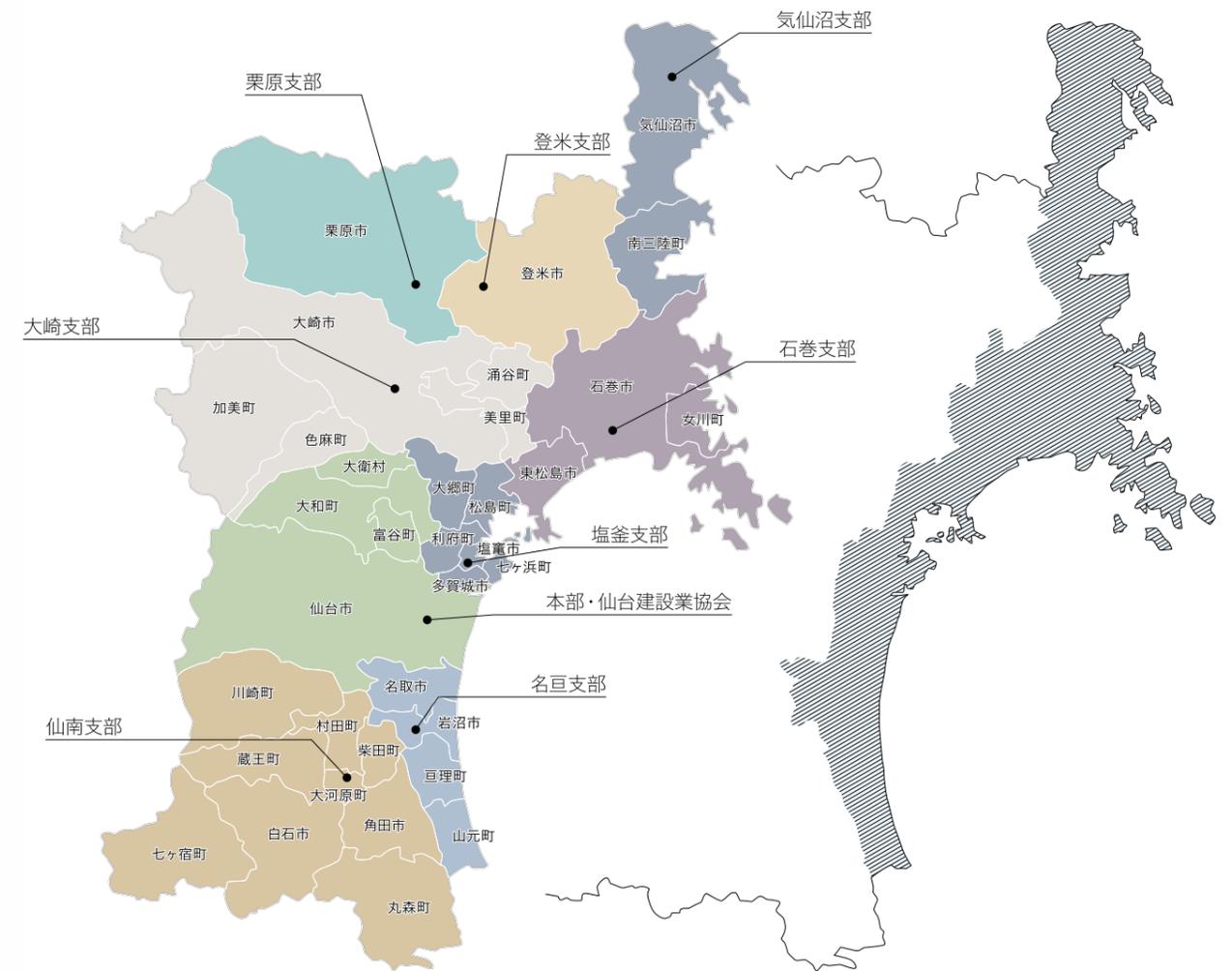
## 活動内容

国や宮城県、NEXCO東日本等との「大規模災害時における応急対策業務」、口蹄疫や鳥インフルエンザへの対応としての「家畜伝染病の発生時における緊急対策業務」に関する協定等を締結し、有事の際の危機管理産業として、地域並びに住民の安全・安心で快適な暮らしを支える活動を展開している。

平成15(2003)年「宮城県北部連続地震」、平成20(2008)年「岩手・宮城内陸地震」、平成23(2011)年「東日本大震災」、平成26(2014)年「豪雪」をはじめ、災害時にはそれら協定にもとづき、各機関の要請を受け、あるいは自主的にいち早く現場に駆けつけ、早期応急復旧に向けた対応等について組織を挙げた活動を展開して

いる。

そうした献身的な取り組みが評価され、平成26(2014)年3月には、宮城県から災害対策基本法に基づく「指定地方公共機関」の指定を受けた。平成29(2017)年3月には宮城県内の家きんにおいて初めて「高病原性鳥インフルエンザ感染」が発生し、72時間内での防疫措置における埋却等にも対応。協会で策定する防災計画に基づき、定期的な実地訓練等とともに体制整備の強化を図り、協会組織として、地域及び住民の安全・安心で快適な暮らしの実現に寄与するとともに、令和元年東日本台風災害も含め、東日本大震災からの1日も早い「創造的復興」が遂げられるよう総力を挙げて取り組んでいる。



## 東日本大震災対応

直ちに協会本部に災害対策本部を設置。県内9支部のうち、津波被害を受けた沿岸3支部には連絡が付かなかったが、会員企業は自ら被災しながらも被災現場に駆けつけ、道路啓開を開始していた。「俺たちが地域を守る」という使命感から、協会の総力を挙げて、遺体捜索や燃料・食料・衣服の提供、さらには遺体の仮埋葬、腐敗した水産加工物の処理まで、あらゆる要請に応えた。

人員や資機材が大変窮屈な中、現場技術者は厳しい条件の下で懸命に闘い続け、協会本部も課題に直面する度に関係機関に要望活動を行うなどの後方支援を重ねてきた。令和元(2019)年10月の令和元年東日本台風災害で再び大きな爪痕を県内に残したが、復興完遂に向け1日も早い生活再建とともに復興を望む地域の声に応えようと、現在も闘い続けている。

発刊のあいさつ 一般社団法人 宮城県建設業協会会長 千葉 嘉春	4
発刊に寄せて 宮城県知事 村井 嘉浩	5
宮城県建設業協会の概要と活動	6
東日本大震災の概要	10
グラビア 宮城の復興最前線2020	12

## I あれから10年 復興の「今」と「未来」

震災の経験生かし、より良い地域づくりのために	38
1.震災を経験した私たちが、次の世代に語り継いでいきたい	40
宮城県気仙沼向洋高等学校 向洋語り部クラブ 三浦 朱莉さん／熊谷 優那さん／熊谷 樹さん	
2.被災地の役目として、震災当時の姿を残し、津波の脅威を伝えていく	44
気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館 館長 佐藤 克美氏	
3.復興事業の道路や橋の整備により、気仙沼市は大きく飛躍へ	46
気仙沼市長 菅原 茂氏	
4.気仙沼地域の観光振興に大きな恩恵をもたらす「三陸沿岸道路」の開通	50
一般社団法人気仙沼観光コンベンション協会 会長 加藤 宣夫氏	
5.気仙沼市の建設業者が一丸となった取り組みと地域貢献への思い	54
宮城県建設業協会 気仙沼支部 支部長 株式会社小野良組 代表取締役社長 小泉 進氏	
6.「女川人」として、地元と共に歩み、まちの復興に貢献	56
株式会社高政 代表取締役社長 高橋 正樹氏	
7.石巻市民が待ち望んだ「内海橋」が開通。周辺地域の活性化へ寄与	60
宮城県建設業協会 石巻支部 支部長 若生工業株式会社 代表取締役 若生 保彦氏	

## II 変革と伝承 未来へつなぐ地域建設業

小さな取り組みから、よりよい建設業実現へ。 震災を学び伝える取り組みも	62
1.安全・安心を支える、女性のチカラ	64
株式会社武山興業 取締役総務部長 宇都宮 裕子氏／ 吉田川粕川地区災害復旧工事 監理技術者 後藤 智之氏／ 総務部 総務課長補佐 佐々木 ちあき氏／ 総務部 総務課係長 佐藤 亜美氏／	

2.土木技術者として、東日本大震災の被害や復旧・復興について学ぶ	68
若生工業株式会社 建設部 土木課 主任 青山 健氏／ 株式会社小野良組 土木部 工事部長 熊谷 和彦氏	
3.それぞれの3.11 その時、地域建設業はどう動いたのか？	72
株式会社小野良組 土木部 工事部長 熊谷 和彦氏／ 若生工業株式会社 建設部 土木課 主任 青山 健氏／ 株式会社武山興業 土木部 土木課 主任 後藤 智之氏	

## III 地域を支えるチカラ コロナ禍の社会貢献活動 最前線で闘う医療従事者と、地域産業を応援

1.ともに支え合い、地域を元気に	78
一般社団法人宮城県建設業協会 総務部主事 今野 有美氏	
2.コロナ禍の花弁業界を支援する「花いっぱいプロジェクト」	82
宮城県農政部 技術参事兼農村振興課長 金須 豊洋氏	
3.医療用物資のひっ迫を救った 宮城県建設業協会によるマスクの提供	84
宮城県 保健福祉部 長寿社会政策課 介護政策専門監 関 剛史氏／ 一般社団法人 宮城県建設業協会 専務理事兼事務局長 西村 博英氏	

インタビュー① 東北楽天ゴールデンイーグルス 銀次選手	86
-----------------------------	----

インタビュー② 道端 カレンさん	90
------------------	----

対談 震災の教訓を生かし、安全・安心な地域づくりへ	95
一般財団法人 3.11伝承ロード推進機構代表理事 今村 文彦氏 一般社団法人 宮城県建設業協会会長 千葉 嘉春氏	

資料編 宮城県の予算額の推移	104
宮城県への復興交付金の交付可能額	105
宮城県内自治体への復興交付金の交付可能額	106
宮城県における防潮堤災害復旧・復興の進捗状況	106



M9.0  
高さ  
18.4m

## 東日本大震災

2011年3月11日午後2時46分

震源は三陸沖(牡鹿半島の東南東130km付近)

マグニチュード9.0(宮城県北部で最大震度7)

津波浸水高は最大18.4m(女川町)

宮城県内の浸水面積は327km<sup>2</sup>

# 復興への架け橋 待望の開通へ

## 気仙沼湾横断橋(整備中) 愛称: かなえおおはし

三陸沿岸道路の「気仙沼湾横断橋」は2020年6月21日に接続工事が完了し、2021年3月6日開通に向け舗装や付属工事が続いている。正式名称は県民アンケートの結果により、20年10月9日に正式決定した。2本の主塔から延びるケーブルで支えられる斜張橋として、主塔間360メートルの長さで東北トップとなる(2020年10月21日撮影)





気仙沼湾横断橋は全長1344メートル。完成により気仙沼港インターチェンジ(IC)―大島IC間が結ばれる。震災復興のシンボルとして、走行時間の短縮や水産物などの輸送効率化、三陸の観光振興への貢献が期待される(2020年8月20日撮影)



# 半世紀を経て つながった 島民の悲願



## 気仙沼大島大橋

気仙沼大島大橋は2020年4月7日で開通から1年。開通により島内への客足が大きく伸び、新たな観光コースの提案や周辺施設の整備などが進んでいる。気仙沼湾と一体となった景観は、観光資源としての価値も高い(2020年8月20日撮影)

# 大島の魅力伝える 集いの場

## 気仙沼大島ウェルカム・ターミナル

気仙沼大島の観光拠点施設「気仙沼大島ウェルカム・ターミナル」が2020年6月6日にオープンした。新型コロナウイルス感染拡大の影響で3カ月遅れとなったが、大橋の玄関口に位置する施設として、島の魅力発信と観光客の新たなくつろぎの場としての役割が期待される(2020年8月20日撮影)



「気仙沼大島ウェルカム・ターミナル」は観光案内や産直、観光客らがくつろぐ多目的スペースを備える(2020年10月21日撮影)



イベントなどにも活用できる屋外共用スペース。隣接する商業施設(写真左)は2019年7月にオープンした「野杜海(のどか)」(2020年8月20日撮影)



# 復興の道 さらに北へ

## 三陸沿岸道路 歌津本吉道路

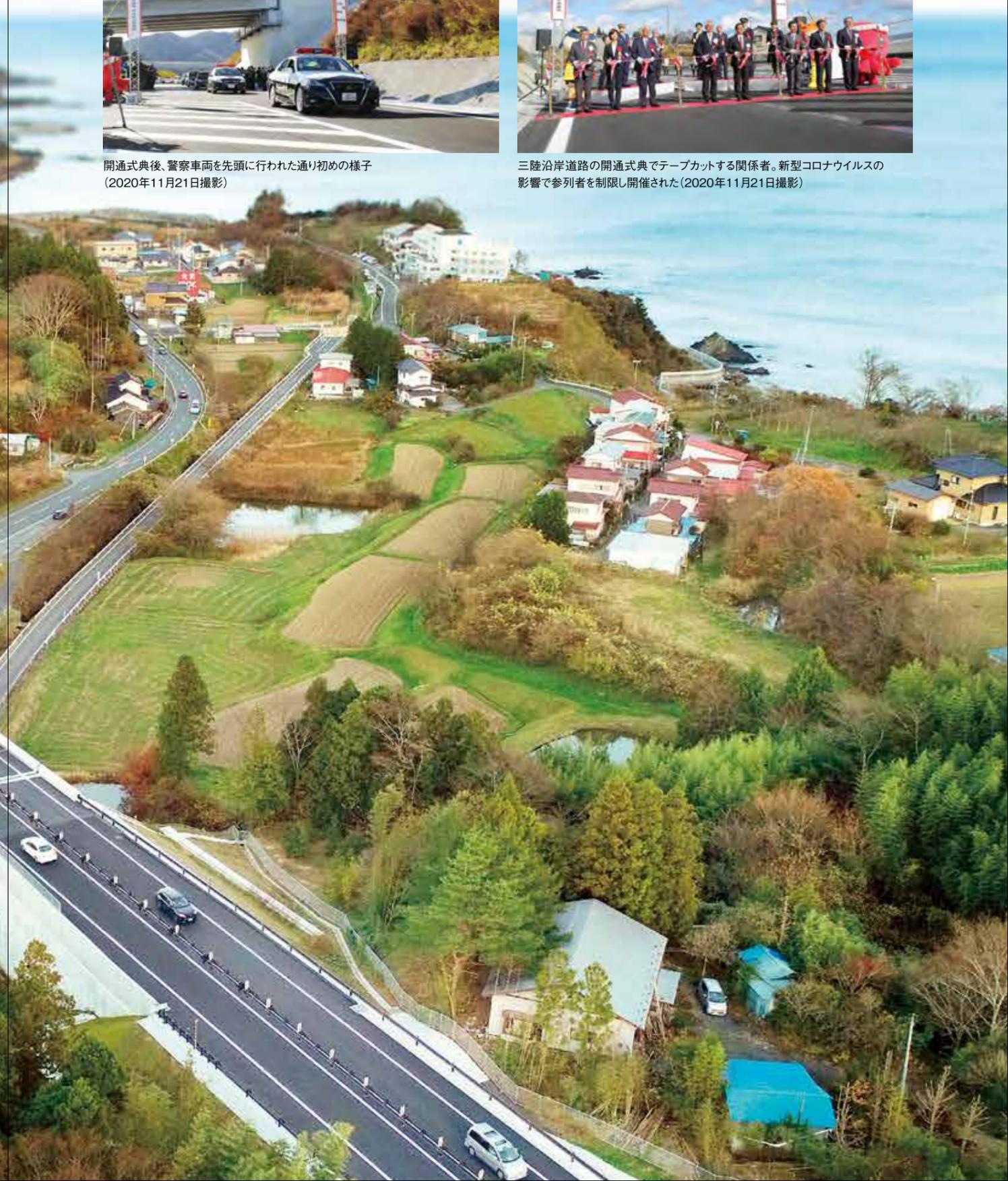
三陸沿岸道路の、小泉海岸インターチェンジ(IC)一本吉津谷IC間(いずれも気仙沼市)2.0キロが2020年11月21日に開通した。これにより歌津本吉道路全線が開通となり、仙台市と気仙沼市間の移動時間がさらに短縮された。地域間交流の活性化など地域復興への期待が一層高まる(2020年11月21日撮影)



開通式典後、警察車両を先頭に行われた通り初めの様子  
(2020年11月21日撮影)



三陸沿岸道路の開通式典でテープカットする関係者。新型コロナウイルスの影響で参列者を制限し開催された(2020年11月21日撮影)



# 津波浸水地 交流の場として再生



## 気仙沼市パークゴルフ場

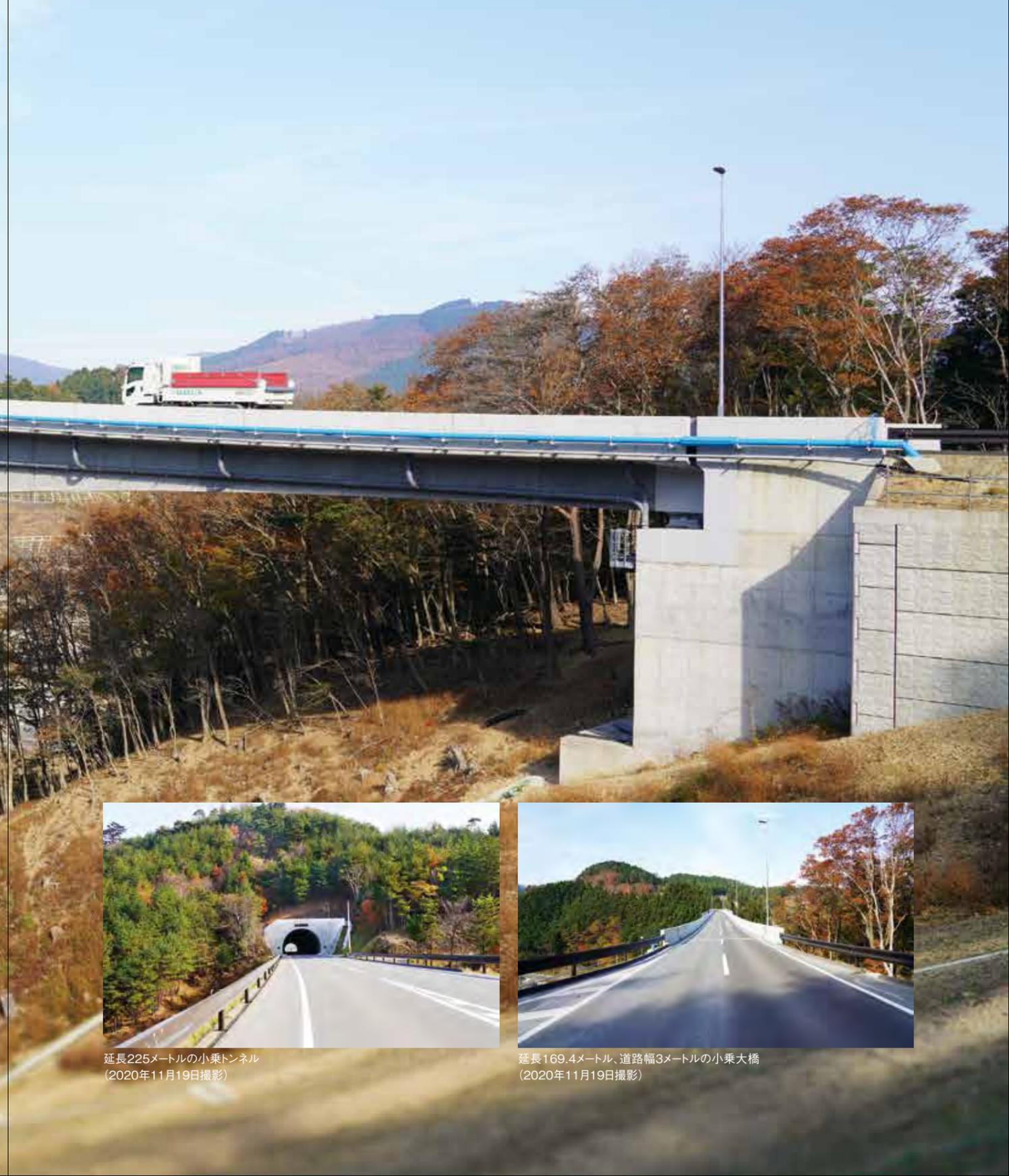
気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館(写真左中央)隣接地に、2020年9月1日にオープン。震災遺構として公開される旧気仙沼向洋高校のグラウンド跡地に整備された施設で、初級者から上級者まで楽しめるコース設定が特徴。市内外から多くの利用客が訪れている(2020年8月29日撮影)

# 地域の暮らしと、 安全・安心を支える道



## 女川牡鹿線「小乗浜復興道路」

女川町の女川牡鹿線と牡鹿半島公園線約1.0km間を結ぶ「小乗浜復興道路」が2020年3月22日開通した。復興道路には小乗大橋と小乗トンネルが新設され、地域住民のアクセス向上や地域活性化の役割を担う。災害時には避難道路としての活用も想定する(2020年11月19日撮影)



延長225メートルの小乗トンネル  
(2020年11月19日撮影)



延長169.4メートル、道路幅3メートルの小乗大橋  
(2020年11月19日撮影)

# 新たな歴史刻む 復興のシンボル



開通式の見学会で、新内海橋の渡り初めをする  
地域の子どもたち(2020年9月29日撮影)

## 石巻市「新内海橋」

石巻市中心部と湊地区を結ぶ国道398号の「新内海橋」(全長202メートル)が2020年9月10日に開通。旧北上川に架かる内海橋は老朽化が進み東日本大震災で被災したため、上流側約100メートルに架け替えた。市民に親しまれてきた交通の要衝が、「復興のシンボル」として生まれ変わった。(2020年9月29日撮影)



# 丘の上から語り継ぐ 震災の記憶

## 南三陸町 震災復興祈念公園

南三陸町内に整備を進めてきた震災復興祈念公園が2020年10月12日に全面開園し、10月13日から一般開放された。南三陸杉を利用した「中橋」(写真左中央)も開通し、市街地と祈念公園がつながった。犠牲者名簿を安置した石碑が立つ「祈りの丘」(写真右中央)や「語り継ぎの場」(写真中央左)が設けられ、犠牲者の追悼と震災継承の場となる(2020年10月28日撮影)



公園内には、町職員ら43人が犠牲となった旧防災対策庁舎も遺構として保存される(2020年10月28日撮影)

# 祈りとともに 震災の教訓を未来へ



## 石巻南浜津波復興祈念公園(整備中)

東日本大震災の津波で壊滅的な被害を受けた石巻市南浜地区に、総面積38.8ヘクタールとなる「石巻南浜津波復興祈念公園」が2021年3月28日開園となる。公園中央部には、震災の記憶を後世に伝える「みやぎ東日本大震災津波伝承館」を配置。震災の犠牲者追悼や記憶伝承に向けて整備が進む。(2020年10月28日撮影)



整備中の「石巻南浜津波復興祈念公園」上空から北を望む。写真左には、震災遺構の旧門脇小学校が見える(2020年10月28日撮影)

# 震災から学んだ 「備え」「伝承」融合の地

## 仙台市 東部沿岸地域 津波防災・減災対策

仙台市東部沿岸地域の防災・減災対策として、「東部復興道路(かさ上げ道路)」(写真左)、「避難の丘」(写真手前)の整備を進めた。東部復興道路(かさ上げ道路)は高さ6mの堤防機能を持たせ、多重防御で津波からの被害を軽減させる。避難の丘は震災遺構「荒浜小」(写真中央)南側に位置し、津波来襲時には最大約5300人の収容が可能(2020年9月17日撮影)



# 未来に伝えるべき教訓 ここから



## 震災遺構 中浜小学校

山元町の東日本大震災の遺構「中浜小」は、2020年9月26日から一般公開された。震災当時、校舎屋上の倉庫に避難した児童や住民ら90人全員の命を救った校舎が、被災したままの状態で開催され、津波の脅威と災害への備えの大切さを伝える（2020年9月29日撮影）

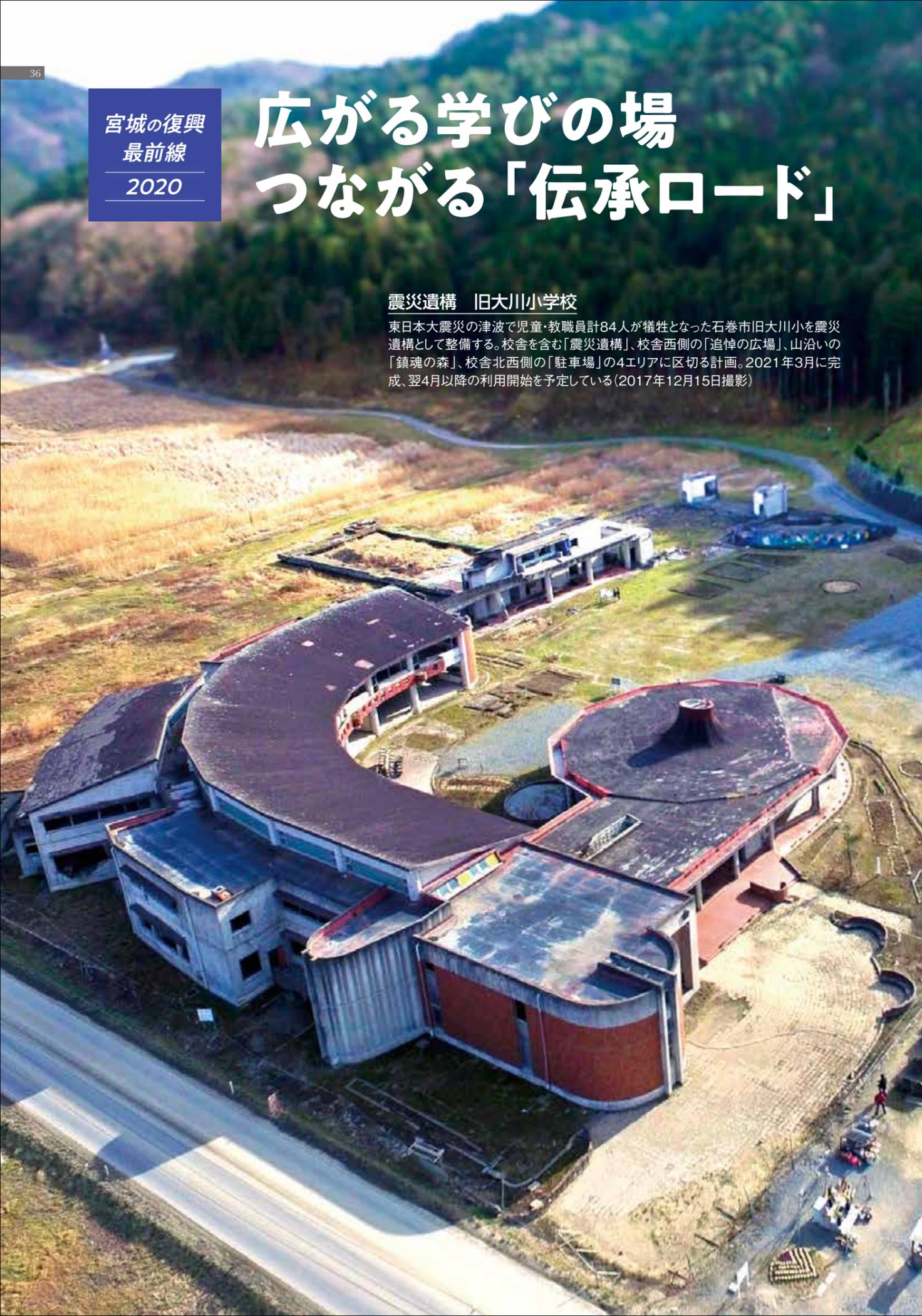


開館記念式典でテープカットする関係者。ハト形の白い風船を空に飛ばし開館を祝うと共に、防災教育の大切さを再確認した（2020年9月26日撮影）

# 広がる学びの場 つながる「伝承ロード」

## 震災遺構 旧大川小学校

東日本大震災の津波で児童・教職員計84人が犠牲となった石巻市旧大川小を震災遺構として整備する。校舎を含む「震災遺構」、校舎西側の「追悼の広場」、山沿いの「鎮魂の森」、校舎北西側の「駐車場」の4エリアに区切る計画。2021年3月に完成、翌4月以降の利用開始を予定している(2017年12月15日撮影)



## 震災遺構 旧門脇小学校

津波と火災の痕跡を唯一残すとされる石巻市の震災遺構「門脇小」を整備。2021年度中の一般公開を目指す(2020年7月14日撮影)



## 震災遺構 荒浜小学校

仙台市の震災遺構「荒浜小」では2017年4月から一般公開され、津波の恐怖や地域の記憶が継承される(2020年11月4日撮影)



I

# あれから 10年

復興の「今」と「未来」



## 震災の経験生かし、 より良い地域づくりのために

東日本大震災の経験から学び、その教訓を多くの人に伝える。現在、被災各地ではこうした活動が広がっている。一方、復興のリーディングプロジェクトと位置付けられる三陸沿岸道の全線開通を間近に控え、気仙沼地域を中心とした沿岸各地では、復興の総仕上げに向けた基盤整備が着々と進んでいる。震災から10年を迎える今、地域に寄り添い復興と向き合ってきた人たち、それぞれの思いに迫る。





宮城県気仙沼向洋高等学校  
向洋語り部クラブ

宮城県気仙沼向洋高等学校「向洋語り部クラブ」のメンバー。  
左から、三浦朱莉(みうら あかり)さん、熊谷優那(くまがい ゆうな)さん、熊谷樹(くまがい たつき)さん(いずれも3年生)

## 震災を経験した私たちが、 次の世代に語り継いでいきたい

宮城県気仙沼向洋高等学校では、2020年7月に生徒の有志による「向洋語り部クラブ」を立ち上げ、「気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館」を中心に、ボランティアとして語り部活動を実施。現在、33名のメンバーが地元高校生の視点で、震災や津波の恐ろしさを来館者に伝えている。今回、「向洋語り部クラブ」で活躍する熊谷樹さん、熊谷優那さん、三浦朱莉さんに語り部活動への思いなどを語ってもらった。



気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館  
震災の津波で被災した当時の宮城県気仙沼向洋高等学校の校舎に、震災伝承館を加えた施設

### 語り部活動で伝えたいこと

**熊谷(樹)** 私が語り部を始めようと思ったのは、自分自身も東日本大震災で被災して家を流され、その経験が忘れがたいものだったからです。当時、小学二年生だったのですが、まるで昨日のこのように思い出されます。そうした体験を伝えたいという思いがあり、ちょうど学校に語り部クラブができたので、ぜひやってみたくて思いました。

**熊谷(優)** 私自身は、震災で家の被害はあまりなかったのですが、震災から10年が経ち、周りの小さい子は震災のことを知らないで、震災が忘れられてしまわないように私自身が伝えていけたらいいなと思ったのが、語り部を始めたきっかけです。

**三浦** 小さい子は震災を知らないで、津波の怖さを忘れないように、震災を経験した私たちでしっかり語り継いでいきたいなという思いがありました。

**熊谷(樹)** 他県から修学旅行や防災学習で訪れる学校の生徒などに対し語り部をしています。見学している生徒さんがいろいろと質問してくれます。同



3階の教室には津波で流れ着いた車のほか、震災当時そのままの姿を留めている

世代ということもあるのでしょうか。ここで得た経験をそれぞれの学校に持ち帰って、学校からさらに周りの地域に発信してほしいですね。

**三浦** 被災した校舎で説明をしていると、「このライトは津波の威力でこんなに曲がったのですか」な



校舎と校舎の間に折り重なった車の説明する三浦さんと熊谷(優)さん。「ここには何台の車が重なっていると思いますか」などの質問を交え、見学者の関心を引き寄せる

それぞれの地域で震災の教訓をつないでいってほしい。

三浦朱莉さん



ど、私たちが気付かなかったことを発見して下さる方も多いですね。自分たちが思っているより、相手にしっかりと伝わって、津波の怖さを実感してくれていると感じます。

**熊谷(優)** 語り部をすると、すごく感謝されることや防災意識が高まったと声をかけていただくこともあって、本当にやってよかったと思います。

### 震災の記憶を風化させないために

**熊谷(樹)** 震災の風化が言われていますが、地元ではそんなに感じません。被災した地域でも風化しているところもあるでしょうし、逆に、震災を経験していない地域の方々もたくさん来館しますが、そうした方たちは「震災の記憶を風化させない」という思いがあったり、防災意識が高かったりすることもあります。

**熊谷(優)** 来館した人に説明していると、「こんなにすごい津波がきたのか」と驚く人がいる一方で、こちらが一生懸命話していても興味がないように聞いて



「被災地に生まれた者として、震災の記憶と教訓を後世に伝えていく使命がある」と力強く語る、高校生の語り部たち。こうした取り組み自体も後輩たちに引き継がれていく

震災の記憶が鮮明に残っている私たちが発信していきたい。

熊谷樹さん



いる人もいます。そういう時には、震災が風化しているのかなと思うこともあります。

**三浦** 震災から10年も経つので、震災の記憶も危機感も少しずつ薄れている部分はあると思います。でも、この施設で震災の現場を見て、語り部を聞いていただくと、「津波ってこんなに大変だったんだ」と再確認してもらえます。ここに来た方が震災の大変さをさらに他の人たちに語り継いでくれることを考えると、風化はしていますが、また新しく生まれていくものもあると感じています。

**熊谷(樹)** 来てくださった方には、ここで起こった出来事を自分事として考えてもらいたいですね。いざ災害が起きた時に、ここで見たことを生かしていただくためにも、「地元に戻って周りの方に伝えてほしい」ということは、必ず話すようにしています。

**三浦** ここでの体験を地元を持ち帰って伝えるだけではなく、次の世代にもその教訓をつないでいって、その地域の方々の防災意識をもっと高めていけるといいですね。

**熊谷(優)** 震災を知らない人たちが聞きにくること

防災意識が高まったという声を聞き、語り部をやったよかったと思った。

熊谷優那さん



もあり、震災について深く考えていない方もいると思いますが、自分の地域にも災害が起こるかもしれないと思って、日頃から防災について考えてほしいです。

**熊谷(樹)** 私は地元の専門学校に進学が決まり、今後いろいろな形で、語り部活動に携わっていきたくて考えています。これから生まれてくる子どもたちや小さい子たちは震災を知らない世代なんです。自分たちは震災を経験して、その記憶も鮮明に残っている世代だと思うので、そこから発信していくことは大切なことだと思っているので、語り部活動を続けていきたいです。

**熊谷(優)** 私は気仙沼を離れてしまっていますが、震災の経験は他のところでも、出会った人たちに伝えていけたらと思います。

**三浦** 私も地元を離れて大学に進学しますが、ボランティア活動や防災教育に力を入れている大学なので、さまざまな機会に自分が語り部をしていた経験も含めて、震災のことを伝えていきたいです。

(2020年11月21日インタビュー・撮影)



気仙沼市東日本大震災  
遺構・伝承館  
館長 佐藤 克美氏  
さとう かつみ

## 被災地の役目として、 震災当時の姿を残し、 津波の脅威を伝えていく

2019年3月にオープンした「気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館」。震災を後世に伝えるこの施設の館長・佐藤克美氏に「伝えていくことの大切さ」を伺った。

### 当時、気仙沼で何が起きたのか

「気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館」は、被災した気仙沼向洋高校の旧校舎と震災伝承館からなる施設で、震災当時の姿を残し、津波の脅威を伝えていく役割を担っている。被災した校舎を実際に見学し、館内で津波や被災者の想いを伝える映像を見て、当時、気仙沼市で何が起きたのかを知っていたとき、当たり前な生活がいかに大切かを感じていただければと思う。来館者の感想を掲示するコーナーを設けているが、ある小学6年生はこんな感想を残してくれた。「いつもすぐ隣に大切な人がいるなんて当たり前だと思ってたけど、そのことはとても幸せで大切に、貴重でかけがえのないことだ。そんな幸せが瞬間に奪われていくのはどんなにつらいことかと実感した。私たちのやるべきことはそれを守ることだと思った」。こうした感想に接し、私たちが思っている以上に伝承館から発するメッセージが皆さんの心に響いているのではないかと感じる。

### まちは、これからが本当の復興

2019年3月10日にオープンし、2020年3月末には来館者が8万7千人を超え、コロナ禍で約2カ月間の臨時閉館を余儀なくされる中、9月27日には10万人に達し、本当にありがたく思う。当館では、気仙沼

向洋高校の生徒33名を含め、地元の中高生80名が語り部活動をしている。「けせんぬま震災伝承ネットワーク」の語り部と共に、この伝承館をサポートしてくれている。地元の生徒たちの語り部の存在は、本当に頼もしい。もはや生徒たちの語り部活動なくして、この伝承館を語れない。生徒たち自身が「我々の世代が震災のことを語り継がなくてはいけない」と言っているように、語り部活動は被災地として継続していかなければならないことだ。

### 施設を支える高校生の語り部たち

現在、気仙沼市には気仙沼大島大橋が架かり、三陸道の整備も進んでいる。ライフラインが整備されることで、復興の速度も上がった。まちとしては、これからが本当の復興だ。震災当時は、こうした復興の姿など、想像すらできなかった。私は市の職員としてがれきの撤去にあたっていたが、地域の建設業の方々に尽力していただき本当に感謝している。まさに「気仙沼一丸」となって復旧を成し遂げた。地域の建設業の協力なくして、今の復興はなかった。全国の自治体からも支援をいただき、本当に感謝という言葉しかない。震災10年を迎えるにあたり、震災を振り返り、考える場所として、より多くの方に当館に足を運んでいただきたいと願う。  
(2020年11月21日インタビュー・撮影)

震災遺構として公開されている旧気仙沼向洋高校の校舎。手前が南校舎、奥の白い建物が北校舎。併設する伝承館は、震災の様子を伝える展示室、映像シアター、談話室などを備える





気仙沼市長  
すがわら しげる  
菅原 茂氏

## 復興事業の道路や橋の整備により、気仙沼市は大きく飛躍へ

三陸沿岸道路の開通で、人の往来や物流の活性化、観光振興などが期待される気仙沼市。新しいランドマークとなる気仙沼湾横断橋も開通へ。

東日本大震災から立ち上がり、復興に向けて歩み続けるまちは、さらにその先を目指している。

2020年6月21日、三陸沿岸道路気仙沼湾横断橋の接続工事完了を記念し開催された、主桁閉合式典



式典には地元の小学生も参加。記念のボルトを締め付け橋の連結を祝った(2020年6月21日撮影)

### まちの復興の象徴 「気仙沼湾横断橋」

気仙沼市の復興事業には時間がかかってしまったという思いがあるが、震災から10年、ようやく復興がかたちになってきた。国土交通省による復興プロジェクトの三陸沿岸道路の開通が現実のものとなり、宮城県が整備を進めていた気仙沼大島大橋は2019年4月に供用が開始され、本当に感謝しかない。

三陸道の開通は、人の往来や物流の活性化、観光振興など、気仙沼市の大きな飛躍につながると期待

している。市民の暮らしにおいても、救急医療施設への搬送時間が短縮されるなど、まさに「命の道」だ。三陸道そのものが防災機能を持ち、災害発生時には避難場所にもなり、物資搬送の基軸になる。この三陸道で、すばらしい景観を誇るのが、2020年度内に完成予定(\*)の気仙沼湾横断橋だ。気仙沼湾を横断する橋は格別な魅力があり、橋そのものが大きな観光コンテンツになる。気仙沼市の新しいランドマークであり、復興の象徴だ。

※のちに2021年3月6日開通と発表された。

## 復旧・復興事業は、道路啓開から始まる。建設業者の皆さんには、震災直後から、献身的に取り組んでいただいた

### 震災伝承は、被災地の責務

復興事業において、震災遺構を残し、後世に伝えていくことは、我々のような大規模な被災地の責務だと思っている。2019年に開館した「気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館」を通じて、震災を知らない世代やその先の世代、また、津波のリスクが高いと言われている全国の沿岸地域の皆さんに対し、津波災害を伝えていきたい。そのためには、多くの人に訪れていただくことが大事だと思っている。

2020年9月には「気仙沼市パークゴルフ場」がオープンした。これは、株式会社小野良組が創立100周年を記念して整備し、市に寄贈してくれたもので、思いがけず素晴らしいご提案をいただき、市民への大きなプレゼントになった。「気仙沼市東日本大

小泉海岸IC～本吉津谷IC間の開通を祝い行われたテープカット。大勢の関係者と地域住民らが喜びを分かち合った(2020年11月21日撮影)

震災遺構・伝承館」に隣接したこの場所は、活用について苦慮していたが、パークゴルフ場ができたことで時間の経過とともに相乗効果を生み、市民のみなさんはもとより、県内外からの集客も見込める。それをより促進してくれるのが、三陸道だと思っている。

### 建設業の技術力と現場力

復旧・復興事業は、すべて道路啓開から始まる。建設業の皆さんには、自らも被災している中、震災直後から献身的かつ継続的に道路啓開やがれきの処理を行っていただき、大変感謝している。気仙沼市では、宮城県建設業協会の会員を中心に、市内の建設業者の皆さんが一丸となって復旧作業を行った。震災当時、「このがれきは片付かないのでは」と思っ



開通式で挨拶に立つ菅原市長。仙台東IC～気仙沼港IC間が1本の道でつながることを祝うとともに、多くの関係者に感謝の意を述べた(2020年11月21日撮影)

どの状況だったが、見事にきれいにさせていただいた。復興工事においても、地元の業者の皆さんをはじめ、「自分たちが復旧・復興させるんだ」という意気込みのもと、多くの発注に応じていただいた。今後も有事の際には、現場力を発揮していただきたいと思う。建設業の皆さんは、プロとしての技術で、安全を確保しながら初動を起こすことができる技術集団だ。復興が一段落した後は、国土強靱化を推進する中で、老朽化が進む地域のインフラ整備への貢献をお願いしたい。高齢者が増える中、まちづくりへの技術的な対応なども期待している。

2021年、宮城県における三陸道の全線開通の年に、気仙沼市が舞台となるNHKの連続テレビ小説『おかえりモネ』が放映されるのは、奇跡的な巡り合わせだ。復興10年目に気仙沼市が舞台になることは、幸運以外の何ものでもない。これは、被災した気仙沼市民の皆さんが、このまちを復興させようと一人一人が真摯に歩んできたことに対するご褒美であろうと私は思っている。この価値を最大化し、私たち気仙沼市のこれからへの弾みにしたい。

(2020年12月3日インタビュー)



地域住民からの「開通おめでとう」「市長ありがとう」などの声に、手を振り応える菅原市長。2020年度末に予定される、三陸道の全線開通が待ち遠しい(2020年11月21日撮影)



# 気仙沼地域の観光振興に 大きな恩恵をもたらす 「三陸沿岸道路」の開通

東日本大震災で大きな打撃を受けた観光の復興に向け、着実に歩を進めてきた気仙沼観光コンベンション協会。震災後、さまざまな観光施設がオープンする中で、復興のリーディングプロジェクトである三陸沿岸道路が地域を結び、観光振興への期待が高まっている。



一般社団法人  
気仙沼観光コンベンション協会  
会長 **加藤 宣夫**氏



三陸道の小泉海岸IC～本吉津谷IC間が、2020年11月21日に開通。仙台市内や仙台空港からも直接アクセスでき、気仙沼観光の追い風となる(2020年12月2日撮影)

## 観光復興への道のり

気仙沼市は東日本大震災で甚大な被害を受け、当初はとても観光どころではなかった。気仙沼観光コンベンション協会も会員約130名の半数以上が被災し、協会の事務所も津波の被害で、重要な資料やイベントで使うユニフォームなども全部流されてしまった。そんな中で、2012年に会長に就任し、さまざまな支援を受け、気仙沼市の地域ごとの観光協会を一つに統合し、一緒になって観光の復興に努めてきた。

この10年で地域の復興も進み、2020年11月21

日には、三陸沿岸道路の「小泉海岸IC～本吉津谷IC」間が開通し、気仙沼市中心部と仙台市が高速道路で結ばれ、2020年度内には気仙沼湾横断橋も完成予定だ。宮城県最北端の港町、気仙沼市がようやく高速交通体系に組み込まれ、人の往来がスムーズになり、仙台空港とのアクセスもよくなり、シャトルバスなどもダイレクトに乗り入れることができる。水揚げ日本一を誇る生鮮カツオをはじめとする水産品が大都会の消費地に並ぶことで、気仙沼のブランド化も進むだろう。三陸道が整備されたことで、気仙沼市にはかなりの恩恵がもたらされると期待している。



三陸道の気仙沼中央IC～気仙沼港IC間開通  
(2020年2月24日)



三陸道の小泉海岸IC～本吉津谷IC間の開通式  
(2020年11月21日)

## 三陸道による他観光地との連携

震災後、市内にはさまざまな観光施設もでき、観光資源も豊富に揃っている。例えば、気仙沼大島大橋や気仙沼大島ウェルカム・ターミナル、中心部の内湾地区の新しい商業施設、唐桑半島ビジターセンター・津波体験館、海水浴場やトレッキングコースなどもある。「気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館」も、震災を伝える施設として大きな役割を果たしてくれよう。震災ツーリズムは、気仙沼市単独でなく、石巻市、南三陸町などの沿岸の地域と連携し、広域に進める必要がある。被災した場所の見学だけではなく、芸能や楽しいアトラクションなども加味し、地域の人が震災から立ち上がった姿を見てもらいたいと思っている。

また、気仙沼市、涌谷町、南三陸町、岩手県陸前高田市、平泉町の2市3町による「みちのくGOLD浪漫—黄金の国ジパング、産金はじまりの地をたどる—」が、地域の歴史や特色を通じて文化・伝統を伝える「日本遺産」に登録された。気仙沼市では、大谷鉱山跡という歴史遺産がある。三陸道の開通と同時に観光地同士も連携し、こうした「日本遺産」や震災ツーリズムなどで、観光客が各地を周遊するようなプログラムなども工夫していきたい。さまざまな支援や努力により、気仙沼圏も観光入込客数が回復傾向にあったが、コロナ禍で先行き不透明な状況になっている。その中でも明るい話題として、2021年度前期に放送されるNHKの連続テレビ小説『おかえりモネ』は気仙沼市と登米市が舞台であり、観光振興への効果を期待している。

気仙沼大島の観光施設「気仙沼大島ウェルカム・ターミナル」が、2020年6月6日、産直部分を含め全面開業。大島観光の拠点として多くの観光客誘致が期待される(2020年8月21日撮影)



## 気仙沼は、文化も、歴史も、自然の景観も、おいしい食材も豊富にあり、やる気さえあれば、世界に発信できる



東日本大震災の発生直後から保存してきた新聞を読み返す加藤会長。震災後の数年間、新聞から「観光」の文字が消えたと振り返る(2020年12月2日撮影)

## 気仙沼の魅力を伝える使命

被災地の人間として、建設業の皆さんには頭が下がる思いだ。当時、津波で流された車、船、廃材などが積み重なり、まちはがれきの山だった。地域建設業を中心に全国から集まった建設業の皆さんにがれきをきれいに片づけていただき、日本の建設業の力はすごいと思った。復興工事が一段落した後は、新しい時代に向けて、三陸道からアクセスする枝線や地方道路の建設が必要になる。地域建設業には、ユニークな施設の建設など「夢のプロジェクト」も期待したい。

どん底でも、忍耐強く準備していれば、必ず道は開ける。気仙沼市は、文化も、歴史も、自然の景観も、おいしい食材も豊富にあり、あとはやる気さえあれば、全国に、世界に発信できる。それが我々の使命であると思う。

(2020年12月2日インタビュー)



かつて本土と大島を結んでいた定期航路は、気仙沼大島大橋の開通を機に、2019年4月7日、その役目を終えた。フェリーは現在、大島の浦の浜地区に係留され当時を偲ばせる(2020年10月21日撮影)



「気仙沼大島ウェルカム・ターミナル」敷地内に置かれた、大島の津波浸水域を示した石碑。震災の教訓を伝える役割も担う(2020年8月21日撮影)

歩道から気仙沼湾を一望できる気仙沼大島大橋。この景観は気仙沼観光の大きな魅力でもある。2020年は観光客の大幅増が期待されたが、コロナ禍による影響は想像以上の打撃となった(2020年10月21日撮影)





宮城県建設業協会  
気仙沼支部 支部長  
株式会社小野良組  
代表取締役社長 こいずみ すずむ 小泉 進氏

震災直後から、がれきの撤去や道路啓開、復旧・復興工事に全力で取り組んできた地域建設業。2020年9月にオープンした「気仙沼市パークゴルフ場」は、株式会社小野良組が創立100周年記念事業として市に寄贈。地域と共に歩む建設会社は、これからの時代を見据えている。

気仙沼市パークゴルフ場。取材当日も多くの利用者がプレーを楽しむ(2020年12月3日撮影)



## 気仙沼市の建設業者が 一丸となった復旧・復興に 向けた取り組みと 地域貢献への思い

### チームワークで復興へ

東日本大震災で気仙沼市は甚大な被害を受け、がれき処理から復旧・復興工事において、かなり大変な思いをしながら、ここまで進んできた。震災直後からのがれき処理は、宮城県建設業協会の会員を中心に、気仙沼市に登録している工事業者などを含めた市内の約90社でチームを作り、市と協定を結んで取り組んだ。大量のがれきを前に見通しも立たない中、2011年内にはがれき撤去を終わらせたいという市の意向を受け、我々とはにかく一丸となってやり遂げた。

その後、防潮堤、護岸や道路の復旧・復興工事が始まり、当社もキャパシティを超えるような状況の中で、土木部門も建築部門も尽力してきた。2013年に社長に就任した際には、やるしかないという思いで、「復興に全力」という方針を掲げ、社員みんなで共有してきた。復興工事が全て終わるまで、全力を尽くしていく所存だ。宮城県建設業協会の気仙沼支部の会員企業もそれぞれ復旧・復興の仕事に取り組み、チームワークをとりながら共に進んできた。

### 企業は社会のために

2020年9月1日に「気仙沼市パークゴルフ場」が、旧気仙沼向洋高校グラウンド跡地にオープンした。これは、当社が創立100周年記念事業として、パークゴルフ場のコースや管理棟などを整備し、市に寄贈させていただいたものだ。当社は、創業者である小野寺良助の「企業は社会のために存在する」という理念のもと、地域貢献に取り組んできた。100周年を

迎えるにあたり、昔の資料を調べていると、創立50周年を記念した社報に、「事業は地域社会への奉仕である」という小野寺良助の言葉が記されており、改めて社の在り方を確認できた。パークゴルフ場は、そうした当社の理念を実現したもので、また、階上(はしかみ)地区への恩返しという思いもある。階上地区の皆さんは、がれき処理場などで大変な思いをされ、その地域に貢献できることはないかとずっと考えていた。パークゴルフ場が完成して利用していただき、地域の方々が楽しんでいる姿を見て、本当にうれしく思っている。県内外からの利用者も多く、流入人口が増えることも期待したい。

### 建設会社も提案力が必要な時代へ

復興のその先を考えると、建設業も官公庁からの発注を待っているだけでは成り立たなくなるだろう。例えば、地元の「ここに道路が必要だ」「港湾を整備してほしい」などの声をもとにプロジェクトを立ち上げ、民が官を動かして仕事をつくっていく必要がある。まちづくりなどのプロジェクトを主導していくことも、これからの時代の建設業の在り方ではないかと思う。もちろん、国土強靱化の中で、建設業の果たすべき仕事はあるが、その先を見据えていかなければならない。大規模災害が増える一方で、地域建設業の人手不足が進む現実がある。その中で、災害が起きた時の応急・復旧対応をどうするかについては、官民で連携してシステムをつくっていかねばならない。建設業も、まちづくりや災害対応のしくみづくりなどへの提案力が大事になってくるだろう。

(2020年12月3日インタビュー)



旧気仙沼向洋高校グラウンド跡地に整備された、気仙沼市パークゴルフ場。雪が少ない地域の利点を生かし、冬季間の誘客も期待される(2020年12月3日撮影)



株式会社 高政  
代表取締役社長 たかはし まさき 高橋 正樹氏

## 「女川人」として、 地元と共に歩み、 まちの復興に貢献

公民連携の先進的な復興の取り組みが注目される女川町。震災直後がれきに埋もれたまちで、いち早く地域建設業が道路啓開に動き、民間が主導する復興の起点となった。地元の食、生業を通じ、まちの復興へ尽力する高政の取り組みを伺った。

「地元のために」というみんなの思いが繋がって、  
まちの復興が進んでいった。

### がれきの中にできた道

東日本大震災で被災し、当時、女川町は完全に陸の孤島となった。道路が寸断され、トラックも船も入ることができなくなった上に、病院も水没、食料も医療物資も手に入らないという状況に陥った。

震災の翌日、津波でがれきだらけになったまちの姿を改めて目にし、とんでもないことが起こったと思った。その時、地元の田中建設が道路を啓開しているのに気が付いた。まだ災害対策本部も立ち上がっていないはずなのに、がれきが避けられ道ができていた。そのことに驚くと同時に、自分もただ待っているだけでなく、何かをしなければと思った。早速、避難所にかまぼこを配りながら、避難者の人数を確認したりなど、できることを始めた。地域建設業が義侠心を持って、いざという時に最大限に良心を発揮し、自ら動いた。その姿に教えられ、自分も「負けていけない」と強く思った。

役場庁舎も水没し、役場の方々も被災、家族が亡くなっている状況で災害対策本部が機能しない中、民間が動き始めた。やれる人間がまず動く。それが、ずっと続いてきたのが、民間中心と言われる女川町



本社工場に隣接する高政女川本店「万石の里」の店内。地域の方はもとより観光バスも立ち寄る店舗(2020年12月18日撮影)

の復興だ。震災の翌月には、さまざまな業種からなる民間組織「女川町復興連絡協議会」を立ち上げ、役場と共に公民連携し復興を進めてきた。震災で営業休止していた女川魚市場も7月には再開し、秋にはサンマが水揚げされた。漁業関係者も「何としても女川にサンマを揚げたい」との思いで尽力し、水産業のまちを活気づかせた。復旧・復興を振り返ると、最初の一步は、田中建設の道路啓開だった。そこから、「地元のために」というみんなの思いが連鎖し、復興が進んでいった。

高政の店舗が入る女川の地元市場「ハマテラス」。週末には町内外から多くの人が訪れる人気スポットとして定着(2020年12月18日撮影)



## 地域へ恩返しのかまぼこ

わが社も震災で工場や設備などに大きな被害を受けたが、幸い津波は免れた。応急電源車による電力供給を受け、工場の唯一動くラインでかまぼこをつくり、女川町をはじめ、石巻市、東松島市のすべての避難所に配っていった。当時、避難所では温かい食べ物がなかったので、熱々のかまぼこを届けるようにした。避難所では、「ありがとう」とかまぼこを受け取って、涙を流しながら食べている方もいて、こちら胸が熱くなった。

「企業は地域に生かされている」が、わが社の社是だ。震災で亡くなった祖父には、小さな頃から恩返しの大切さを教えられ、震災の後、今やらないでいつ



建設中の浦宿橋(仮称)。石巻市から女川町に向かう国道398号から分岐し、海を渡って浦宿浜地区に入る。2021年3月の完成を目指し整備が進む(2020年12月18日撮影)

やるのかという思いがあった。震災から10年経つ今でも「あの時に避難所をかまぼこを食べました」と声を掛けられることがある。また、石巻市の避難所をかまぼこを食べた社員が、「これは高政のかまぼこだ。高政は無事だったんだ」と知って、車もない中、歩いて会社まで来てくれた。彼は、早速、みんなと一緒に避難所に配るかまぼこづくりを手伝ってくれた。

## まちと共に生きる覚悟

まちの復興のために、さまざまなことに取り組んだ。まずは、雇用支援。女川町の水産関連の会社は48社あったが、うち44社が震災の津波などで流出、壊滅した。働き口がなくなれば、女川町から人が流出してしまう。そこで、自社の社員を100人から倍の200人に増やした。また、震災で販路を失った企業が販路を取り戻すための手伝いとして、商品レシピづくりなどを行った。さらに、女川町を訪れてもらうため、今でいう震災ツーリズムの周遊コースをつくり、80社ほどの旅行エージェントをまわって営業した。自ら語り部の役もやった。放射能測定装置もいち早く導入し、自社のかまぼこのほか、女川で水揚げされた魚も測定し、スーパーなどで販売してもらえるような支援もしてきた。地元のサッカークラブ「コバル

トーレ女川」のメインスポンサーとして、まちの活気を取り戻すための支援や若手の水産団体の活動を支えるなど、「女川人」として何ができるのかを考え、公私にわたり尽力してきた。震災からこれまで、地元と共に生きる覚悟を決めて過ごしてきた。

## 地元の食材を発信し、地域貢献へ

震災から約5年、復興も進んできた頃、地元とコラボレーションした製品をつくりたいと考えた。そこで、創業80周年の記念事業として、牡鹿半島の桃浦かき生産者合同会社とがっちりタッグを組んでつくったのが、「御膳蒲鉾かき」だ。80年間培ってきた技術を結集させ、かきをおいしく食べていただくためのかまぼこづくりを目指した。地元の味を伝え、お客さまの記憶に残るものをつくることで、地元への貢献にもなる。この製品は、2017年度(第56回)農林水産祭の水産部門で、全国から出品された製品の中から最高賞である天皇杯を受賞した。

震災で、我々はインフラの大切さを痛感した。建設業の方々には、インフラに携わる者としての自信と誇りを持ち、その力を遺憾なく発揮していただきたい。インフラが整備され、安定した日常があってはじめて、幸せに暮らせることを我々は忘れてはならない。



地元とのコラボレーションで生まれた「御膳蒲鉾かき」は、2017年度農林水産祭で天皇杯を受賞。写真上:女川本店の天和に飾られた表彰状とカップ。写真下:店内に陳列された「御膳蒲鉾かき」。「牡蠣本来の味が楽しめる」と好評でリピート客も多い(2020年12月18日撮影)

震災直後に地元のために動いた田中建設のように、これからも地域建設業には地元と共に歩み、まちづくりを進めていただきたいと願う。

(2020年12月18日インタビュー)

魚の町女川のシンボルでもある女川湾。写真右には魚市場や水産加工施設などが広がる。(2020年12月18日撮影)

## 協会支部の連携

東日本大震災の直後は、被害のあまりの大きさに何をやっていいのかわからないような状態だった。宮城県建設業協会の石巻支部は、石巻市、東松島市、女川町で構成されているが、支部を中心にがれきの処理や道路啓開に取り掛かった。我々だけで



内海橋開通の様子。震災から9年半となる2020年9月10日、初代から数え4代目となる内海橋がついに開通した



開通前に行われた、地域住民らの参加による「通り初め」(2020年9月10日撮影)

# 石巻市民が待ち望んだ「内海橋」が開通。周辺地域の活性化へ寄与

災害復旧への使命感を持って、甚大な被害に立ち向かった地域の建設業は、「自分たちのまちを自分たちで」との思いを胸に、復旧・復興工事にまい進してきた。復興の象徴である内海橋の完成に、まちは活気づく。

は人員が不足している中で、大崎支部と栗原支部が支援要請に応じていただき、石巻市内で一緒に道路啓開を行った。こうした連携は、協会の組織があっただけではじめてできることだとありがたく思った。当時は、とにかく資機材と人員が全く足りなかった。特に記憶に残っているのは、気仙沼市小泉地区にある小泉大橋が落橋し、仮橋を架ける段取りをした時のことだ。津波で防潮堤も破堤し、海と陸の境が全くなくなっているのを見て、本当に大変なことが起きたと思った。

建設会社には、「災害対応への使命感」というDNAが間違いなくあると思う。震災直後から、それぞれの建設会社が自発的に復旧作業を行った。使命感がなければ、命を懸けてまで、壊滅的な状況になったまちの復旧作業はできない。復旧・復興工事においては、担当する現場代理人や技術者なども被災しており、身内が亡くなった社員もいる状況の中で、みんなが尽力してくれたことは、深く印象に残っている。

## 旧北上川の左右岸を結ぶ「内海橋」

私たちが工事に携わった石巻市中心部の旧北上川に架かる内海橋が、2020年9月10日に開通した。工事をしている時には、「いつできるのですか」という声をよくかけていただき、橋の開通に対する皆さんの期待を感じた。工事の際には、ご不便をかけた部分もあったと思うが、地域の方はとても協力的で、不思議なほど苦情もなかった。それだけ、石巻市民にとっては特別な思いのある橋なのだと思う。みんなが望んでいた橋の工事に携われたのは、建設業者の冥利につきる。橋からは、新しく整備された堤防や護岸などを一望することができ、復興を実感できる場所だ。地域の活性化へ向けた一つの道しるべとなるだろう。

## 地域建設業は「町医者」

震災を振り返ると、地元の建設業者でなければできないことがあると思う。自分たちが暮らしているまちだからこそ、「自分たちでなんとかしなくては」という思いがあり、前向きに作業に取り組める。まちのどこに、どんな人が住んでいて、何があるのかは、地域の建設会社が一番知っている。だからこそ、復旧作業を迅速かつ的確に進めることができる。

地域の建設業はまさに「町医者」だと思う。大病院では手の行き届かないようなところに対処するのが我々の役割だ。例えば、浸水被害があれば、深夜であってもポンプ車を出動させ、バリケードを設置して安全を確保し、身動きが取れなくなっている人を助けるなどの対応だ。災害時には地域の建設会社の力が必要だ。地域建設業のこれからのためには、人手不足も懸念されるが、働き方改革を推進することも一つの解決策だろう。ハードルが高い部分もあるが、休暇や雇用形態の問題などに一つずつ取り組んで、地道にやっていくことが大切だと思っている。

(2020年12月3日インタビュー)



宮城県建設業協会  
石巻支部 支部長  
若生工業株式会社  
代表取締役 若生 保彦氏

開通直後の内海橋。石巻地域の発展や新たなまちづくりを支える大動脈として期待される(2020年9月10日撮影)



## II

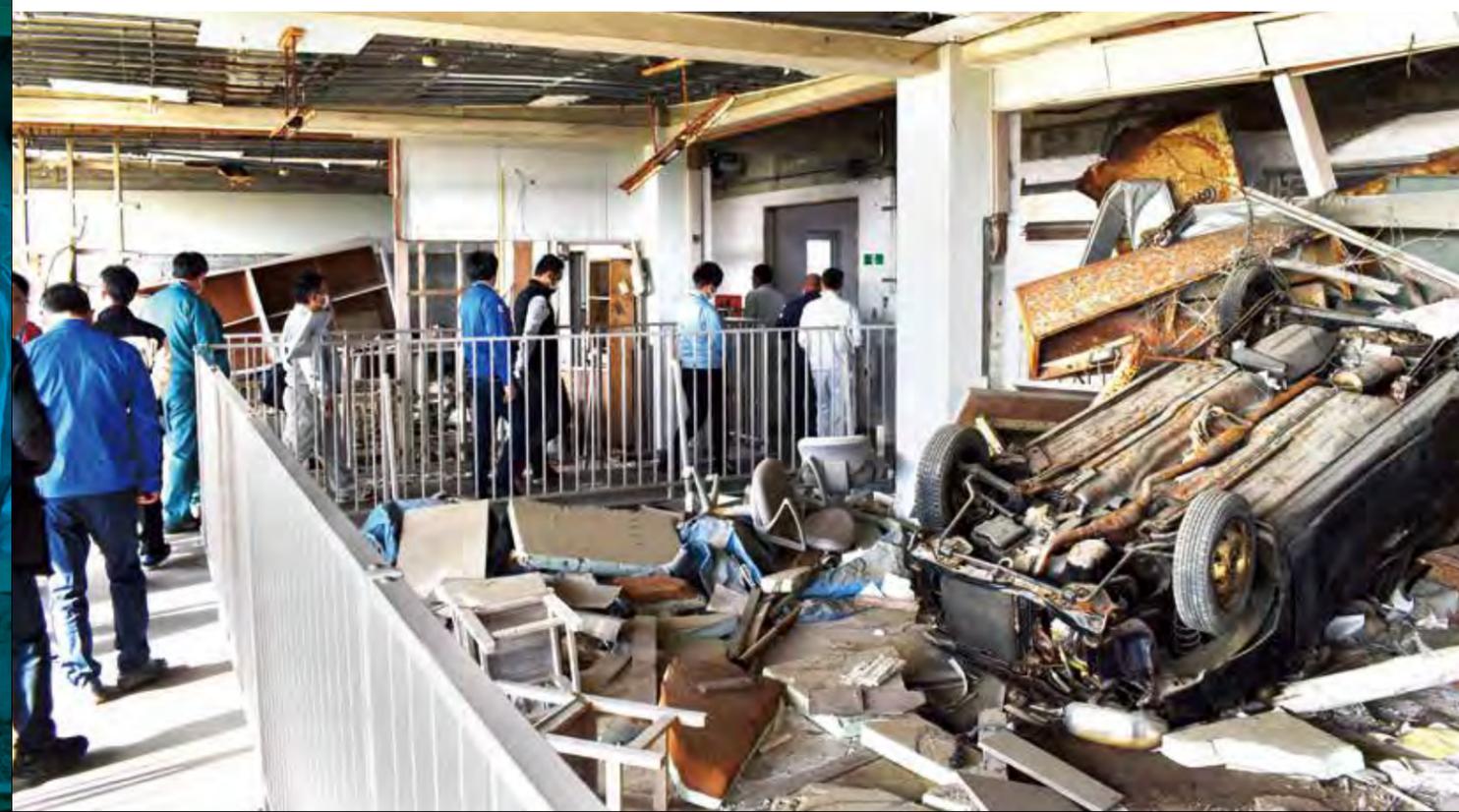
# 変革と伝承

未来へつなぐ地域建設業



## 小さな取り組みから、 よりよい建設業実現へ。 震災を学び伝える取り組みも

地域の安全・安心と快適な暮らしを支える地域建設業は、女性の視点を生かした建設現場の安全管理や、働く環境改善に積極的に取り組んでいる。さらに、震災を振り返り、そこから得た教訓を未来へとつなぐ活動も続ける。変わるべきことは自らの手で、伝えるべきことは地域社会と手を携えて。地域建設業の次代を見据えた挑戦が続く。





作業員とコミュニケーションをとりながら、現場の安全を確認する女性パトロール隊(2020年9月15日撮影)

## 安全・安心を支える、

女性ならではの視点を事故防止に生かそうと、株式会社武山興業(本社石巻市)では、「女性パトロール隊」が建設現場を巡視する取り組みを実施。現場の安全を守る女性の活躍を紹介する。



パトロールでは現場担当の監理技術者に対し、厳しく指摘することも(2020年9月15日撮影)

### 危険箇所などを改善し、働きやすい環境に

株式会社武山興業(本社石巻市)では、女性社員による「女性パトロール隊」を組織し、定期的に建設現場の安全確認を行っている。普段、現場にいる作業員が気付かない細かな点や女性目線で危険に感じた箇所を改善し、事故を抑止するのが狙いだ。

2020年9月15日には、前年の令和元年東日本台風で被災した大郷町の「吉田川粕川地区災害復旧工事」の現場を女性パトロール隊が巡回。同社専務執行役員の武山利子氏、取締役総務部長の宇都宮裕子氏、総務部総務課長補佐の佐々木あき氏、同係長の佐藤亜美氏の4人がチェック表を携え、工事現場や設備のほか、トイレの清掃状況、作業員の身だしなみなどを確認しながら声をかけた。



令和元年東日本台風で被災した大郷町の吉田川粕川地区。約1年が経過した時点でも、災害の爪痕が色濃く残る(2020年9月15日撮影)

## 女性のチカラ

「30年ほど前に私一人でパトロールを始め、1996年からパトロール隊を組織し継続しています。現場にいる人が気付かなくても、私たちが現場を歩いて危険だなと感じたことには何かあるはずなんです。危険を回避するには、女性の力はとても大事だと思っています」と武山専務執行役員。事務職の女性社員が現場を知ることで建設業に対する理解が深まり、作業員への思いやりも生まれ、社内コミュニケーションが円滑になる効果もあると話す。

「現場での作業は、暑さ寒さの中で気を引き締めてやらなくてはいけないので、大変です。パトロールの時には、『安全をお願いしますね』『何か困っていることはありませんか?』などと声をかけることで気持ちが伝わって、少しでも工事する方の安全につながればと思っています」と取締役総務部長の宇都宮氏。

同災害復旧工事の現場を担当する監理技術者の後藤智之氏は、「女性パトロール隊は現場にいる私たちとは見るところが違います。そうした指摘による現場環境の改善が、安全に気持ちよく仕事をするにつながっています」と話す。女性パトロール隊の活躍が、建設現場で働く人々の安全を守っている。



女性パトロール隊として活躍する株式会社武山興業 取締役総務部長  
うつのみや ひろこ  
宇都宮 裕子氏



## 女性の視点を生かし、事故を防止へ



株式会社武山興業  
吉田川粕川地区災害復旧工事  
ことう ともゆき  
監理技術者 後藤 智之氏

### 細やかな指摘を受け、 現場の環境を改善

入社して14年になるが、正直なところ、当初は女性パトロール隊の見回りは煩わしいと思っていた。ところが、女性パトロール隊からさまざまな指摘を受けるにつれ、現場にいる我々とは見ているところが異なると感じた。忙しくなってくるとトイレの清掃をはじめ細かなところは疎かになりがちだが、そういう点を指摘され改善することで、気分よく安全に働くことにつながっている。今は、私が入社した頃とは世の中も変わり、働き方改革が推進されるなど、働く環境の整備は重要になっている。

やはり、きれいで整理された現場事務所や工事現場では危ない作業もなくなるなど、作業の仕方も変わってくる。女性パトロール隊のお陰で、安全に仕事に取り組めているので、これからもどんどん活躍してもらいたい。

(2020年9月15日インタビュー)

### 建設業の仕事は 人々の当たり前を守ること

現場をパトロールすると、暑さや寒さの中で集中力を保って作業している皆さんはすごいと思う。今はまだ、日々勉強の身だが、建設現場の大変さを理解し、現場で働いている皆さんに寄り添えるようになりたい。実際に、パトロールで指摘したところがすぐに改善されているので、うれしく思う。

建設業は「ものづくり」というイメージが強かったが、東日本大震災を経験し、「建設業は人々の当たり前を守る仕事」だと思えるようになった。橋や道路、堤防などの復旧・復興工事が進み、みんなが便利に利用している様子を見るようになり、建設業という仕事に携わっていきたいとの思いが強くなった。

(2020年9月15日インタビュー)



株式会社武山興業 総務部 総務課長補佐  
ささき  
佐々木 ちあき氏

### 復興する被災地の姿に 建設業の力を実感

入社以来、パトロールに携わっている。私たち女性がパトロールして指摘することで、安全につながっていききたい。東日本大震災の時、高校生だった私は、テレビで地元の建設会社ががんばっている姿を見て、この会社で働きたいと思った。実際に入社してからは一日も早く力になれるようにと精いっぱいだった。震災で甚大な被害を受けた被災地がここまで復興した様子を見ると、改めて建設業の力を感じ、その「つくる力」は魅力だと思った。

建設業の担い手不足が心配されているが、携わってみたいとわからないこともあるので、イメージにとらわれずにチャレンジしてほしい。

(2020年9月15日インタビュー)



株式会社武山興業 総務部 総務課係長  
さとう あみ  
佐藤 亜美氏



「東日本大震災津波伝承館」で、津波の威力を伝える展示物を見学する参加者

# 土木技術者として、 被害や復旧・復興に

東日本大震災の被害の実態を把握し、復旧・復興について学ぶ「3.11伝承ロード研修会」に参加。震災の風化が懸念される中、地域建設業の土木技術者一人一人が震災を振り返り、インフラ整備への思いや技術、防災意識を未来へとつないでいくための新しい試みだ。

旧気仙沼向洋高校の校舎の屋上で、ガイドの説明を聞く参加者。震災の教訓を伝承することの大切さを再確認した



## 震災被害の実態

宮城県建設業協会は、「3.11震災伝承ロード推進機構」と連携し、土木施工管理技士を対象にした研修会を企画し、2020年11月19日に実施した。

一行はバスで「気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館」を訪れ、震災の津波で被災した当時の気仙沼向洋高校の校舎を見学。語り部の説明を聞き、津波被害の実態や避難行動への認識を深め、震災を振り返った。



整備中の気仙沼湾横断橋を渡る土木技術者の一行。技術者の視点で細部までくまなく見学した

# 東日本大震災の ついて学ぶ

## 気仙沼湾横断橋の最新技術

技術者の一行は、その後、気仙沼湾横断橋の工事現場へ。三陸沿岸道路の気仙沼湾横断部に架かるこの橋は、復興のシンボルとして2021年3月6日開通を目指し、整備が進められている。主塔から張られたケーブルで橋桁を支える「斜張橋」と呼ばれる形式は、特殊で難易度の高い技術を要する。参加者は、整備中の橋を歩いて横断しながら、国土交通省東北地方整備局・仙山河川国道事務所による説明に耳を傾けた。津波被害への対策として、海面から橋桁まで32メートルの高さを確保していることなどの特徴を聞き、橋の高さや技術力を体感していた。

気仙沼湾を望む景観は三陸道随一とも言われ、観光資源としても期待される



## 映像で知る津波の威力

岩手県陸前高田市に移動した一行は、「東日本大震災津波伝承館 いわてTSUNAMIメモリアル」へ。ガイドの説明を受けながら、津波に破壊された鋼鉄製の橋桁や津波の映像、命を守る教訓を学ぶパネルなどを見学。釜石市や宮古市の建設業者による復旧の様子を伝える展示パネルの説明に、深くうなずく姿も見られた。

同協会の専務理事兼事務局長の西村博英氏は、「自身の体験や携わっている復興工事の現状はよく知っていても、震災の全体像を把握できていないことも多い。今回の研修会を通じ、どのような震災があって、どのように復興してきたのかを改めて学び直す機会にしたい」と語った。被災地の建設業者として、震災を後世に伝えていくための新しい取り組みとして注目される。



三陸沿岸を襲った実際の津波の映像が、その脅威を伝える



震災復旧の様子を伝えるガイドの説明を聞き、当時を振り返る参加者も

## 建設業を志す人に、 復旧・復興を伝えたい

今回、研修会に参加し、改めて震災を振り返り、震災体験を後世に伝えていくことは大切だと思った。「東日本大震災津波伝承館」では、岩手県の建設業者が震災直後に道路啓開を行った様子を知ることができた。我々建設業はいち早く復旧に取り掛からなくてはならない業種なので大変なこともあるが、これから建設業に入ってくる若い人には、「私たちがいて、はじめてまちづくりができる」と伝えていきたい。気仙沼湾横断橋の見学の際は、構造や工事の過程などをイメージし、大きな工事のすごさを感じた。私自身、震災後に気仙沼市の小泉大橋の仮橋をつくる工事を担当し、そこから復旧が始まったことを思い出した。建設業の魅力は、自分の携わった工事が、目に見えるかたちになることだ。みんなが暮らすまちをつくり、地域に貢献できる仕事を誇りに思う。

(2020年12月3日インタビュー)



若生工業株式会社 建設部 土木課  
主任 あおやま けん 青山 健氏

## あれから10年、 震災を振り返る機会に

「気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館」には、今回の研修会で初めて訪れた。震災遺構の気仙沼向洋高校は私の母校であり、在学当時のことが思い出され、被災した校舎の姿にとってもショックを受けた。語り部の説明から、震災当時の状況や避難の様子も伝わってきた。私自身、国道の維持管理の仕事に携わっていたので、気仙沼湾横断橋の見学では、この高さや状況でどんな維持管理が必要かなどを考えた。素晴らしい技術で橋が整備されているのを目の当たりにし、すごいと思った。その一方、三陸沿岸道路が整備されることで、被災した国道45号を利用する人が減り、震災の風化につながることも懸念される。今回の研修会に参加したことで、震災を振り返る機会を得た。あれから10年、道路啓開から復旧・復興まで、「建設業でなければできない仕事をやってきたのだ」と改めて思った。

(2020年12月3日インタビュー)



株式会社小野良組 土木部  
工事部長 くまがい かずひこ 熊谷 和彦氏

Great East Japan Earthquake

それぞれの

3.11

## その時、地域建設業はどう動いたのか？

2011年3月11日14時46分。東北地方を未曾有の大地震が襲った。  
各地で甚大な被害が出る中、地域建設業はいち早く災害対応に動く。

自らも被災しながら、緊急車両や物資輸送のための道路を啓き、  
港湾を啓開し、堤防の応急復旧に尽力した。

東日本大震災の発生時、建設業者はどう動き、震災の体験を経て、今何を思うのか。

震災から10年、復旧・復興に携わる技術者たちが振り返った。



被災直後の東松島市大曲浜地区。あまりの惨状に多くの人が「復興は不可能では」と落胆する中、被災各地では地域建設業が動き出していた(2011年4月8日撮影)

## 物資を運ぶ道路を啓き、 緊急車両の走行車線を確保

### 津波襲来後の光景

震災当時、私は国道の維持補修工事を担当していた。運転中に地震に遭い、すぐに事務所(気仙沼市長磯大窪)に向かい、国土交通省からのパトロールの指示に備え、待機した。事務所は高台の海の見えない場所にあったが、「津波が来た」という声を聞き様子を見に行くと、すでに津波が襲来した後で、家や車などが流され、電柱がなぎ倒されるなど、考えられないような光景が広がっていた。事務所で一夜を過ごし、翌日、被災状況や現地の調査に着手。道路啓開に必要な重機の調達や運搬ルート考えた。まずは、緊急車両の走行車線を確保し、物資を運ぶ道路を啓開。大型ダンプの往来で道路が傷み、随時、補修の必要があり、高潮で道路に流れてきた家屋の廃材などの撤去にも追われた。

### 震災で、さまざまな出会いも

2015年からは、気仙沼市の大川河口部に架かる曙橋の架け替え工事を担当した。川の状況や用地の問題などで当初の工期が延び、2020年4月ようやく完成。若手社員に指導しながら2人で取り組んだ。特殊な工事もあり、職人などさまざまな業種の方が関わり、他県からの協力もいただいた。震災によっていろいろな方との出会いがあり、学ぶことも多かった。

震災後、建設業の技術の進歩は著しい。新しい技術に対応できるように、我々も勉強していかなくてはならない。また、若手社員が早く一人前になれるように、バックアップできればと思う。防災意識に関しても、風化しないように気を付けたい。

(2020年12月3日インタビュー)

証言者 1

株式会社小野良組 土木部  
くまがい かずひこ  
工事部長 熊谷 和彦氏



証言者 2

若生工業株式会社 建設部  
あおやま たけし  
土木課 主任 青山 健氏

## 河川や堤防の状況を確認、緊急で土のうを積む対応も

### 安否の確認や高台への避難

北上川の護岸工事(石巻市横川地区)を担当していた時に震災があった。発災後、現場に急行し、作業員の安否を確認。その後、津波が来て高台に避難した。現場では、重機が2台流された。携帯電話もつながらなかったため、直接報告するために会社に向かった。本社周辺も一時2メートルほど浸水し、地域の人が社屋に避難してきていた。私はそのまま会社に泊まり込み、被災状況の確認や調査、パトロールなどを行った。

その後は、国土交通省北上川下流河川事務所・涌谷出張所に待機。河川や堤防の状況を確認し、緊急で土のうを積む対応もあった。4月中頃には、気仙沼市の小泉大橋の仮橋の工事を担当。当時は、食料も燃料も不足している中で、休む間もなく復旧工事があった。

### 「自分たちがやらなくては」との思い

小泉大橋の仮橋の工事が終わった時、地域の人が「開通してよかった」と喜んでくれるのを見て、活力がわき、やりがいを感じた。復旧・復興に携わる中で、自分たちがやらなくてはならない、早く地域の人たちが安心して暮らせるようにしたいという思いがあった。

震災を経験して思うのは、「早めの対応が大事」ということ。早めに対処できれば、被害を軽微に抑えることができる。また、すぐに動けるように、日頃から準備しておくことも肝心だ。建設業もICT(情報通信技術)やAI(人工知能)などの技術が進んでいる。新しい技術を吸収し、地域の人が安全・安心に暮らせるようなまちづくりをしていきたい。

(2020年12月3日インタビュー)



証言者 3

株式会社武山興業 土木部  
ごとう ともゆき  
土木課 主任 後藤 智之氏

## 道路啓開や堤防の復旧を24時間体制で実施

### 建設業者の使命感

震災の当日は、三陸自動車道の工事に従事していた。発災後、すぐに工事をストップして作業員全員の点呼をし、安全確認を実施。仕事を継続するような状況ではないと判断し、津波の情報を伝えて全員を帰した。震災の翌日、翌々日くらいから、社員が会社に戻り、復旧作業を開始。身内が亡くなったり、家を流されたりした社員もいる中、24時間体制で道路啓開、堤防の復旧、川からの越水を止める作業などに全力で取り組んだ。地元の建設業が率先してやらなければ緊急車両も通れないし、捜索もできない。使命感のようなものがあった。我々には機械もあるし、知識もノウハウも行動力もある。地域に建設業がなければ、災害対応の初動が遅れると実感した。

### 被災地の暮らしのために

当時を振り返ると、携帯電話が通じない中、連絡体制の構築が大変だった。そうした経験を生かし、現在、現場では無線機を作業員全員に配り、携帯電話がなくても無線で連絡を取れるようにしている。

復旧・復興工事では、当社は主に三陸沿岸道路、新旧北上川の堤防工事に携わっている。被災地は完全に元通りにはならないかもしれないが、生活する上での不便はなくなってきていると思う。我々が携わった工事は全体から見ればわずかかもしれないが、それは自分の糧になり、何より被災された方の役に立つことができるとの思いがある。建設業は人命、財産を守る仕事であり、なくてはならない仕事だ。(2020年9月15日インタビュー)

# Ⅲ 地域を 支えるチカラ

コロナ禍の社会貢献活動



## 最前線で闘う医療従事者と、 地域産業を応援

2020年、世界的に感染拡大した新型コロナウイルスは、医療現場のみならず地域産業にも大きな影響を与えた。災害時には最前線で緊急対応や復旧に尽力する地域建設業が、コロナ禍においては、人々の暮らしを彩る花卉業界を支え、ひっ迫する医療体制の支援ほか、さまざまな支援活動を展開。地域の暮らしと命を守る人々を、地域建設業が支えた取り組みを振り返る。





宮城県建設産業会館(仙台市青葉区)の玄関前のプランターに、冬花の植え替え作業を行なった協会職員と関係者(2020年11月30日)

## ともに支え合い、 地域を元気に

宮城県建設業協会では、地域貢献の一環として、「花いっぱいプロジェクト」を通じ、コロナ禍で需要が低迷する県内の花卉業界を支援。建設現場に花の苗を植えるなどの取り組みが、地域を明るくし、新たな交流のきっかけになっている。



### 建設現場などに花を植え、 花卉業界を支援

新型コロナウイルス感染症の影響で需要が低迷する花卉業界を支援しようと、宮城県建設業協会では、県産花卉の消費拡大を図る「花いっぱいプロジェクト」に賛同し、会員企業に県産の草花の活用を呼びかけた。

その一環として、7月9日、宮城県建設産業会館(仙台市青葉区)の玄関周辺に県産の花を植えたプランターを設置。当日は、同協会および仙台建設業協会の職員らにより日々草、トレニア、千日紅などの苗が植えられ、色とりどりの花が道行く人々の目を楽

しませていた。同協会会長の千葉嘉春氏は「コロナ禍で地域経済が落ち込む中、社会貢献の一環として県産花卉の消費拡大を応援し、花のある環境づくりで皆さんに少しでも元気になっていただきたい」と語った。

県内の建設業界は徹底した感染防止策を講じた上で東日本大震災の復興工事、令和元年東日本台風の復旧工事などを継続する中、建設現場に草花を植えることで、働く環境の改善や工事現場のイメージアップへの効果も期待される。同協会では、会員企業のほか、建設関係機関などにも県産花卉の消費を促すとともに、ホームページや機関誌などを通じて支援活動を紹介し、情報発信にも積極的に取り組む。



県産の花の苗を寄せ植える作業の様子。色とりどりの県産の草花が、建設産業会館の玄関前に彩りを添える

# ひまわりが生んだ交流。 地域建設業と子どもたちの絆



熱海建設の現場事務所(名取市関上)の花壇。気仙沼市立小原木小学校の子どもたちが育てたひまわりの種が受け継がれている(2020年8月18日撮影)

## 工事現場を彩る 思いをつなぐ大輪の花

「花いっぱいプロジェクト」に取り組む会員企業の熱海建設株式会社(本社仙台市青葉区)では、地域の子供たちと一緒に現場事務所ではひまわりを育てている。

このひまわりは、2018年3月に閉校した気仙沼市立小原木小学校の子供たちの思いをつなぐもの。同校で育てていたひまわりを閉校後もさまざまな場所で咲かせようと小原木地

区の子ども会や公民館が中心になって活動。熱海建設では、三陸道工事を通じて地域と関わる中、そのひまわりの種をもらい受け、二十一浜道路改良工事(気仙沼市本吉町)の現場事務所でも育て、さらに、ここで採れた種を他の工事現場にも配布。「花いっぱいプロジェクト」に合わせ、同社の工事現場に「小原木小学校のひまわり」の輪を広げている。工事現場に咲く花を通じ、建設業と地域の新たな交流が生まれている。



「花卉業界を少しでも応援したい」と作業に勤しむ今野氏(写真右)

## 花のチカラで建設業界のイメージアップへ

### 建設業の大切さを伝え、 将来の担い手確保に

宮城県建設業協会の「花いっぱいプロジェクト」への取り組みで活躍する今野有実氏。花のプランター設置作業や同協会の活動を周知するチラシの作成などを担当し、「県内の花卉業界を少しでも応援できれば」と話す。事務所に飾られた花やプランターの草花が周囲をパッと明るくするのを見て、花のチカラを実感するという。「殺風景だった場所でも、花があると雰囲気が変わります。『花いっぱいプロジェクト』を通じたさまざまな活動が、建設業界のイメージアップにもつながればうれしい」と今野氏。

「建設業は地震、台風、豪雨などの災害の際に、最前線で地域を守る誇らしい仕事。建設業を知ってもらうことで、将来の担い手確保につながればと思います。自分ができることで、少しでもサポートしていきたい」と力を込める。

(2020年7月9日インタビュー)



一般社団法人 宮城県建設業協会  
こんの ゆみ  
総務部主事 今野 有実氏

# コロナ禍の花弁業界を支援する 「花いっぱいプロジェクト」

宮城県農政部では、コロナ禍で需要が低迷する花卉業界を支援するため、関係機関や民間企業と連携しながら「花いっぱいプロジェクト」を展開。中でも、県発注の工事などにおける宮城県建設業協会の会員企業の県産花卉を使用した取り組みが評価されている。



花いっぱいプロジェクトに花を提供している  
栗原市の千田園芸さん

## 地域の花弁生産者を応援する 建設業の積極的な取り組み

新型コロナウイルス感染症の影響により、各種イベントの中止や冠婚葬祭の規模縮小などで、県産花卉の需要は大きく減少した。例年、入学式をはじめさまざまな式典の会場には地元産の花がたくさん飾られるが、コロナ禍でキャンセルが相次ぎ、花卉業界は非常に大きな影響を受けた。そうした状況を受け、宮城県農政部では、県産花卉の消費拡大および生産振興のため、「花いっぱいプロジェクト」を実施。以前から花卉の利用促進の取り組みは行っていたが、今回、県

として初めて「県産の花弁」の利用をお願いした。宮城県建設業協会には前向きに取り組んでいただき、会員企業が工事現場を県産の花苗で彩るなど、働く環境への配慮やイメージアップに活用いただいた。2020年10月末時点で、県発注の公共工事において、「花いっぱいプロジェクト」に取り組んだ事例は約280件あり、そのうちの大半を占める約200件が宮城県建設業協会の会員企業によるもので、こうした取り組みを理解していただき、大変感謝している。

「花いっぱいプロジェクト」の積極的な取り組みの一つの例として、「くりはらの花で工事現場のイメージアップ!!」運動がある。これは、北部地方振興事務所栗原地域事務所の若手職員が中心になって実施した。地域で生産される花苗について、宮城県建設業協会栗原支部にプレゼンテーションし、工事現場などでの活用を後押しすることで、地域の花弁農家を応援。この運動を通じ、生産者と建設業者が顔の見える関係になり、今後もこうした関係を継続しながら、地域の生産物を活用する取り組みに生かしていきたい。

「花いっぱいプロジェクト」は、宮城県建設業協会会員企業の各建設現場でも展開(2020年12月10日撮影)



宮城県農政部  
技術参事兼農村振興課長  
金須 豊洋氏



## 災害や家畜伝染病発生時に 重要な役割を果たす地域建設業

地域建設業の皆さんには、道路や河川、および農業基盤整備など、公共インフラづくりを県と一緒に取り組んでいただいている。昨今、豪雨や台風など大規模な災害が多発しているが、地域建設業は災害時の対応や生活インフラを復旧する役目もある。また、CSF(豚熱)や鳥インフルエンザなどの家畜伝染病への緊急対応も担う。2017年に、栗原市の養鶏所で鳥インフルエンザが発生した際には、宮城県建設業協会には埋却作業などで感染拡大防止に貢献していただいた。県は協会と「家畜伝染病の発生時等における緊急対策業務への協力に関する協定」を締結しており、今後も協会の役割は非常に重要だ。

地域の建設業がなくては、災害や家畜伝染病発生の際に初動が遅れてしまう。地域に根差し、地域に住んでいるからこそ地域を知り尽くし、有事の際に迅速

で的確な対応ができる。地域建設業には、将来を担う若手を養成していただき、今後も地域を守る役割をお願いしたい。

(2020年11月26日インタビュー)



宮城県北部地方振興事務所栗原地域事務所の若手職員らが中心となり実施されたワークショップ(2020年5月20日)

## 医療用物資のひっ迫を救った 宮城県



宮城県 保健福祉部 長寿社会政策課  
介護政策専門監 **関 剛史氏**

宮城県は、新型コロナウイルス感染症が広がる中、「医療用資機材調整チーム」を立ち上げ、不足する医療用物資の確保に尽力。宮城県建設業協会は医療系マスクなどを迅速に提供し、医療の現場を支援した。

を出すほどだった。そんな中、建設業で使われている国家検定規格「DS2」防じんマスクがN95マスクと同等の性能ということで、協会の会員企業の備蓄を早急に持参いただいた。私たちはそれを直ちに不足している病院に緊急配布した。N95マスクに関しては、県でも備蓄がなく、基幹病院が手術もできない状況になるのを避けるために奔走していた。そうした中で、迅速な支援をいただき本当に感謝している。

### 医療系マスクが世界的に不足する状況に

新型コロナウイルス感染症が拡大する中、当初、マスクなどの医療用の物資が非常にひっ迫した状況にあった。宮城県では新型コロナウイルス感染症対策本部に、「医療用資機材調整チーム」を立ち上げ、私はその担当として対応にあたった。資金があっても物資の購入が困難なため、備蓄品などの提供を広く呼びかけていた際、宮城県建設業協会から医療系マスク2,000枚、サージカルマスク23,000枚、防護服、ゴーグルなどを迅速にご提供いただいた。

中でも、ありがたかったのは医療系マスクだった。当時、医療現場ではウイルスの感染を防ぐ、高性能の「N95マスク」※が世界的に不足し、手に入らなくなっていた。4月初旬には厚生労働省が使い捨てとされているN95マスクの再利用の留意点をまとめた「N95マスクの例外的取扱いについて」という通達

### 誰もが社会参加できるインフラづくりに期待

東日本大震災からこの10年、建設業の力によって、建物やインフラが整備され、復興が目に見えるかたちとなり、私たちの心を支えてきた。復興期間の次は、私の分野で言えば、病院、福祉施設を中心として、誰もが使いやすく、みんなが社会参加できるような施設が求められる。地域の関わり合いの中で、支え合う場が必要だろう。人々が充実して暮らせる場、安全・安心に暮らせるまちづくりにおいて、地域建設業の力に期待している。

(2020年11月25日インタビュー)

※NIOSH(米国労働安全衛生研究所)のN95規格に合格し、認可されたマスク

## 建設業協会によるマスクの提供

### 県の新型コロナ対策に3000万円を寄付

地域建設業は、コロナ禍において、徹底した感染防止対策を講じ、東日本大震災や令和元年東日本台風による被災者の生活再建のため、復旧・復興工事を行ってきた。自粛が求められる中でも、医療や物流は止めることができない。建設業も道路など社会インフラの維持管理を担ってきた。建設業は地域の雇用の場であり、地域の基幹産業としての役割を果たし、社会貢献に積極的に取り組んでいる。

新型コロナウイルス感染症の影響が広がる中、2020年4月30日には、宮城県「新型コロナウイルス感染症対策寄付金」に、協会として3,000万円を寄付。医療物資不足への支援として、会員企業に呼びかけ、医療系マスク2,000枚、サージカルマスク23,000枚、防護服、ゴーグルなどを県に寄贈させていただいた。市町村に対しては、協会の各支部や企業単位で、寄付金やマスクなどの寄贈を行っている。

### 地域を支える多様な活動を実施

地域のために、「花いっぱいプロジェクト」を通じ、花卉業界への支援にも取り組んだ。これまでも工事現場のイメージアップに積極的に花卉を活用してきたが、今回、地域の小学校と協力して実施したケースなど、協会の各支部がさまざまな活動を展開。2020年7月には、協会本部のある宮城県建設産業会館の前にも、県産の花苗を寄せ植えしたプランターを設置し、11月末に冬の草花への植え替え作業を行った。各事務所などでも花を飾るように呼びかけ、消費拡大を応援している。

また、宮城県赤十字血液センターと「献血推進活動に関する覚書」を締結しており、県内9支部で献血活動を行っているが、コロナ禍にあってもい



©河北新報社  
2020年5月9日河北新報朝刊掲載

つも通りに継続している。感染症対策の啓発に向けて、ポスターを作成し、建設現場のほか、宮城県内の小学校に配布するなどの活動も実施している。  
(2020年12月14日インタビュー)



一般社団法人  
宮城県建設業協会  
専務理事兼事務局長  
にしむら ひろひで  
**西村 博英氏**

# もう一度、日本一へ。



インタビュー①  
東北楽天  
ゴールデンイーグルス  
**銀次**選手

本名・赤見内銀次(あかみないぎんじ)。岩手県出身。盛岡中央高等学校卒業。2006年、東北楽天ゴールデンイーグルスに入団し、ゴールドングラブ賞(一塁手)2017年)、ベストナイン2回(三塁手)2014年・一塁手)2017年)、日本シリーズ優秀選手賞(2013年)を受賞するなど活躍している。明るいキャラクターにファンも多い。

東日本大震災の復興に向け、「がんばろう東北」のスローガンのもと、支援活動を行ってきた東北楽天ゴールデンイーグルス。2013年には、球団創設以来初となる日本一を成し遂げ、被災地に希望の光を灯した。東北出身で、楽天イーグルスで活躍する銀次選手に、復興の支援活動や日本シリーズを制覇した当時の思いなどを伺いました。

© Rakuten Eagles

# 東北をもっともっと元気に。

## 被災した女川町の避難所を訪問

東日本大震災を振り返ると、その当日は、兵庫県明石市でオープン戦を行っていました。その試合が途中で中止になり、東北のほうで大きな地震があったと伝えられたのです。家族と連絡が取れるか確認してほしいとのことで、これは相当大変なことがあったのだと感じました。球場からホテルに戻る時、選手が乗っていたバスのテレビに、真っ黒の津波がダーッと押し寄せる映像が流れ、これは本当のことなのかと信じられない思いでした。

その後、本拠地である仙台市に戻り、球団で被災地へのさまざまな支援活動を行いました。監督、コーチ、選手などによる被災地・避難所の訪問もその一つで、自分は4月上旬に女川町の避難所を訪れ、皆さんに声を掛けたり、子どもたちと触れ合ったりしました。震災の津波でまちがひどい状況になっているのを目にし、言葉もなかったですね。被災して、相当苦労されて、大変な思いをしている皆さんに、自分たちが行くことで少しでも元気になってもらえればと思いました。募金活動も各地で街頭に立って行い、多くの方に協力していただき、あの時は本当に人の温かさを感じました。

「自分たちにできるのは野球しかない」という思いでしたー。



© Rakuten Eagles

皆さんの「ありがとう」という言葉は今も心に残っています。

### 東北のために選手が一丸に

2011年は震災の影響でセ・パ両リーグの開幕が遅れ、開幕を前に、NPB主催の「プロ野球12球団チャリティーマッチー東日本大震災復興支援試合」が行われました。そこで、チームを代表して嶋基弘選手（当時）がスピーチし、その中に「見せましょう、野球の底力を」という言葉がありました。まさに、そういう思いでした。当時の星野仙一監督は、「自分たちにできるのは野球しかない」と言っていて、自分もそういう気持ちでした。

震災後は、ずっと被災地への思いを持って野球をやっていました。もちろん、今もそうです。球場では、皆さんからの声援、優勝を期待する声がたくさん聞こえていましたので、2013年に日本一になった時は本当に良かったと心から思いました。「これで、みんなが元気になってくれたらいいな」と。

2013年のシーズンは、夏頃から、「これはいけるぞ」という感じがありました。試合がどんなに負けてい

も最後に追いついたり、逆転で勝ったりするなど、何か流れのよさがありましたね。打線もつながり、まさに、選手が東北のために一丸になっていました。そして、リーグ優勝を果たし、クライマックスシリーズを勝ち抜き、読売ジャイアンツとの日本シリーズは最終戦までもつれました。日本シリーズ第5戦の延長10回にタイムリーを打った時は、「ここで決めないと試合が決まらない。絶対に決めてやる」と思って打席に入りました。強い気持ちでしたが、一方で、非常に冷静だったんです。打った時のことは、今でも鮮明に覚えています。ボールがピッチャーの手を離れた瞬間、「これは打てる。打ったらヒットになる」というのが、なぜかわかったのです。

### もう一度、楽天で優勝を

球団創設以来初となる日本一を達成し、その年の11月に東二番丁通で優勝パレードが行われました。本当にたくさんの方に来ていただき、とにかくうれし

# 東北楽天 日本一

創設9年目、快挙

巨人に快勝 最後は田中



巨人に快勝 最後は田中

0000000000  
東北楽天 11010000x3

被災地に勇気与えた

選手、少力で戦ってくれた

©河北新報社 2013年11月4日河北新報朝刊掲載

被災地からプロ野球選手が出てほしい。それが、自分の夢です。

かったという思いしかありません。皆さんから「ありがとう」という言葉をかけていただいたことは、とても心に残っています。むしろ、こちらがありがとうと言いたいですね。

当時の星野監督の存在も大きかったと思います。人をやる気にさせる、人を変えるような力を持っている方でした。星野監督には、「とにかくお前は明るくやっ

ていなくちゃ、いい選手になれない。どんなにチームが負けていても、どんなにつらくても、明るくやっ

### 3.11への思いを忘れずに

被災地支援として、岩手県沿岸の宮古市や久慈市などで、野球教室もやっています。野球教室では、子どもたちがみんな一生懸命にやっているのが伝わってきます。子どもたちが笑顔になると、それを見ている親御さんも明るい気持ちになりますよね。自分が行くことで、少しでも喜んでもらえるなら、うれしいですね。「将来、野球選手になりたい」と伝えてくれる子どもたちもいて、とてもやりがいがあります。自分も「楽天で待っているよ」と声を掛けています。こうした野球教室を通じ、被災地からプロの野球選手が出てほしいですね。それが、自分の夢です。

震災から10年になりますが、復旧・復興の先頭に立ってきた地域の建設業は、すごいと思います。震災直後から、道も何も無い状態のところを拓いていった

のは大変なことで、地域建設業でなければできないことだったと思います。そうした復旧・復興に携わった人たちをとて

も尊敬します。今後も災害などの有事の際は、先頭に立って地域を守っていただきたいと期待しています。

震災の風化が言われていますが、3.11は忘れてはいけ

ないことだと思っています。年月が経っても、そのことは心のどこかになく



球団創設9年目で初の日本一に輝いた、東北楽天ゴールデンイーグルスの優勝パレード。21万4000人(主催者発表)が、仙台市青葉区の東二番丁通の沿道を埋め尽くした(2013年11月24日)

インタビュー②

## 道端 カレンさん

モデル、プランナー  
1979年アルゼンチン生まれ。福井県出身。母が日本人、父親がアルゼンチン国籍を持つスペイン人とイタリア人のハーフ。10代でモデルデビューし、現在は雑誌、テレビ、商品プロデュースなどで幅広く活躍中。道端三姉妹の長女で、多くの女性から支持されている。中学生と高校生の息子の母であり、近年はトライアスロンに挑戦し、好成績を収めている。

# 復興支援活動で知った、「東北の魅力」伝えていきたい。



東日本大震災の復興支援として、2013年より開催している自転車イベント「ツール・ド・東北」(主催:株式会社河北新報社、ヤフー株式会社)で、当初から広報大使として活躍している道端カレンさん。支援活動を通して感じた復興していくまちの様子や東北への思いなどを伺いました。

(「ツール・ド・東北2020」は新型コロナウイルスの影響を考慮し、開催を中止)

### 温かな笑顔が迎えてくれる 「ツール・ド・東北」

東日本大震災の復興支援である「ツール・ド・東北」の広報大使のお話をいただいた時は、私にもできる支援活動があると知ってうれしく思いました。トライアスロンをやっていたことで、復興支援に携わることができました。最初は、自分が東北に行って皆さんを元気づけなくてはと思っていたんです。ところが、実際に東北に行って、地元の方の笑顔を見たり、一緒に話したりする中で、逆にこちらの方がエネルギーや勇気、感動をもらいました。それは、私だけではなく、他のライダーたちも感じたことで、そうした思いから



ツール・ド・東北2018では「松島湾クルージング」にも参加。東松島の大高森で下船した道端さんは、多くの地元住民から歓迎を受けた(2018年9月15日)

### 東北の皆さんに、エネルギーや勇気、感動をもらいましたー。

「応援してたら、応援されてた」という大会のキャッチコピーが生まれました。

コースの途中には「エイドステーション」と呼ばれる休憩所が設けられていますが、そこでは地元の皆さんが笑顔で迎えてくれます。漁師のおじさんが自慢げに「これ、俺がつくったんだ。おいしいから食べてみて」とつみれ汁を出してくれるなど、応援に行った私たちがもてなされてしまうのです。この大会が人気なのは、そういう東北の皆さんの温かさ、そこに行けば受け入れてもらえるという魅力があるからでしょう。



エイドステーションでは三陸の海の幸が振舞われる。東北の味覚を堪能しながらの地元の皆さんとの交流は、「ツール・ド・東北」の醍醐味の一つ(2018年9月15日)

### 地元の子どものための メッセージカードの思い出

エイドステーションでは、地元の特産品を生かしたエイド食が提供され、どれも本当においしいですね。女川汁、シーフードカレー、ホタテ、メカブなど、いつもたくさん食べてしまいます。震災直後は風評被害もあり、東北の食をアピールしなくてはという思いも



参加ライダーに配られるドーナツを手に、ボランティアスタッフと記念撮影 (2018年9月15日)

ありましたが、今は「東北の食べ物おいしい」というイメージしかないですね。スーパーなどで、東北の食材を見かけると購入するようになりました。毎回、エイドステーションで地元のボランティアの皆さんと一緒に写真を撮らせていただくのですが、「また来てくれたのね」と覚えてくださって、顔なじみになっています。2020年は残念ながら大会が中止になりましたが、毎年、訪れるのが本当に楽しみなんです。

忘れられないエピソードもあります。2014年に新設された最長の「気仙沼フォンド」220キロに挑戦した時のことでした。それまで経験したことのない距離でしたが、広報大使として走ってみようと思ったのです。ところが、折り返し地点の気仙沼に到着した時には、もう自転車が漕げないと思うほど疲れてしまいました。そんな時にいただいたおにぎりのパックに、メッセージカードが入っていたのです。子どもの字で「がんばって」「いける、いける」などと書いてあるのを見て、涙が出そうになりました。地元の子供たちが、私たち参加者のために一生懸命に書いてくれたメッセージに励まされ、足も痛かったのですが、がんばって完走することができました。

### 震災を家族や友達、周りの人々に伝えていく

コースを走る中で、震災遺構も訪れました。仙台市若林区にある「震災遺構 仙台市立荒浜小学校」では、2階まで津波が押し寄せた校舎の様子や震災前の地域の様子を再現した模型などを見学しました。もっともっと多くの方にこうした震災遺構を訪れていただき



「ツール・ド・東北2014」に向け、コースに組み込まれる気仙沼市内を試走。波路上漁港付近 (2014年5月18日)



「ツール・ド・東北2019」の記者発表では、広報大使としての決意を宣言しました (2019年5月14日)

## もっともっと多くの方に、震災遺構を訪れていただきたい。

たいと思いました。震災当時はまだ小さかった子どもたちが成長し、復興支援など、自分たちのまちのために活動していることに、心を動かされます。私にも中学生と高校生の息子がおり、母親として自分の子どもと重ねて見てしまいます。

2019年は、「ツール・ド・東北」の視察ライドとして、福島県沿岸部と宮城県南の海岸線に沿って、震災の津波が浸水したエリアを自転車で走りました。現地で語り部さんに津波の話聞き、震災前の写真など

を見せていただき、津波の恐ろしさを実感しました。こうした体験は SNS などを通じて、皆さんにお伝えするようにしています。また、自分の子どもたちにも、スマートフォンの写真を見せながら、「ツール・ド・東北」を通じて知った震災のことなどを伝えています。震災の風化が言われていますが、自分の家族や友達など、周りの方に伝えていくことが一つの解決策になるのではと思います。



視察ライドの途中立ち寄った「かわまちてらす 関上」では、眼下に広がる名取川の雄大な景色を堪能 (2019年9月14日)



エイドステーションで、ボランティアからフカヒレスープを振る舞われ、笑顔で受け取る道端さん (2015年9月13日)



ポール・スミスデザイン、ツール・ド・東北2017サイクルジャージにサインする道端さん(2017年5月19日)



「ツール・ド・東北2018」のゴールシーン。参加ライダーらと完走を讃え合いました(2018年9月16日)

## 食の豊かさ、明るく元気な地元の皆さん 復興支援を通じ、東北のよさを知りました。

### 復興していくまちの様子と これからの東北への思い

毎年、「ツール・ド・東北」に参加する中で、まちの復興の様子を感じます。女川町などは訪れる度に変わっていき、きれいなまちになっています。こうしたま

ちの復興は建設業がなくてはできないことだと改めて思います。普段の生活ではあまり意識することはないのですが、実は、建設業が一番大切なところを担っていることに気がきました。人や車が通る道路や住宅など、大事なベースをつくっているのですから、生活していく上で建設業は無くてはならない存在です。これからの東北に、若い人にも受け入れられるような新しい感覚を取り入れた、スタイリッシュなまちをつくってほしいと願っています。

震災以前は、トークショーなどで東北を訪れても、主要駅の周辺にしか行きませんでした。「ツール・ド・東北」という復興支援の機会があったことで、気仙沼や石巻などにも足を運び、東北のよさを知ることができました。自転車を漕いでいて目にする、キラキラ輝く海と山の美しい緑、新鮮でおいしい地元の産物、そして元気いっぱい明るい人々。東北から発信していけるものはたくさんあると思います。これからも、現地でいろいろな話を聞き、体験して、東北の魅力を多くの方に伝えていきたいですね。また、母親世代の代表として、震災を子どもたちに伝えていきたいと思っています。(2020年10月15日インタビュー)

インタビュー中は終始笑顔で、東北への思いを熱く語ってくれました(2020年10月15日)



一般財団法人  
3.11伝承ロード推進機構代表理事

いまむらふみひこ

今村文彦氏

一般社団法人  
宮城県建設業協会会長

ちばよしはる

千葉嘉春氏

### 東日本大震災から10年 震災の教訓生かし、安全・安心な地域づくりへ

東日本大震災から10年を迎えるにあたり、震災の復旧・復興を振り返るとともに、震災の教訓や防災をテーマに、3.11伝承ロード推進機構代表理事の今村文彦氏と宮城県建設業協会会長の千葉嘉春氏が対談を行った。震災を後世に伝える「3.11伝承ロード推進機構」の役割や地域の暮らしを守る地域建設業の使命について語り合った。

(2020年12月14日 宮城県建設産業会館にて実施)

## 東日本大震災は人類が 経験したことのない災害だった(今村氏)

### 1 東日本大震災の復旧・ 復興について

**今村** 我が国は、地震や津波などのさまざまな自然災害を経験してきましたが、東日本大震災は今までにない、いわば人類が経験したことのない災害でした。自然災害に加えて、福島第一原子力発電所事故があり、広域かつ複合的な災害の状況は我々の想像を絶していました。震災以前には、宮城県沖地震がいつ発生してもおかしくない状況ということで、耐震化をはじめ避難訓練などの備えに取り組んできましたが、残念ながら東日本大震災には十分に対応できませんでした。当時を振り



#### 今村 文彦氏

一般財団法人  
3.11伝承ロード推進機構 代表理事

東北大学災害科学国際研究所災害リスク研究部門津波工学研究分野教授。災害科学国際研究所長。2019年9月から同機構代表理事を兼任。山梨県出身。



震災の津波で甚大な被害を受けた、気仙沼市鹿折地区。緊急車両が通れるよう啓開された道路が、かすかに見える(2011年5月8日撮影)

返っていかがですか。

**千葉** 宮城県建設業協会は各機関と有事の際の災害協定を締結しており、その協定に基づき、発災直後から緊急パトロールや点検作業を開始しました。津波などの甚大な被害に対し、これまで経験したことのないような道路啓開や応急復旧作業、さらには人命救助・捜索、貴重な財産であるがれきの処理、ご遺体の仮埋葬・掘り起こし、水産加工物の海洋投棄なども行いました。人員、資機材を有している地域建設業が「何でも屋」として震災復旧の力となりました。自衛隊や消防、警察が被災地に入る前に、道路啓開を行ったのは地域建設業でした。地元を熟知している地域建設業だからこそできたことだと思います。

**今村** 復旧・復興において、防潮堤はまだ完成していませんが、暮らしの基盤である基本的なインフラはほぼ整備されたのではないのでしょうか。今後は、地域のつながりや産業の活性化が課題になってきます。

## 復旧・復興事業において、地域建設業は中心的な 役割を担ってきた(千葉氏)



気仙沼市内の防潮堤工事の様子。地域住民の要望を取り入れながら、完成に向け整備が進んでいる(2020年9月9日撮影)

**千葉** 県内の海岸防潮堤は、合意形成などに時間がかかり、整備計画延長233.8キロメートルのうち、完成率は59%(2020年12月末時点)となっています。復興のリーディングプロジェクトである三陸沿岸道路は、気仙沼湾横断橋の区間が2020年度内に完成予定と全線開通(\*)に向けて整備が進んでおり、各地でまち開きが行われるなど、にぎわいも復活してきています。復旧・復興事業において、地域建設業が中心的な役割を担ってきたと自負しております。

**今村** まちの復興が進む一方で、被災地においても震災の風化が懸念されます。当初から、被災状況の保存や伝承は大きなテーマでしたが、復旧・復興への対応が大変な中で、その一歩がなかなか踏み出せませんでした。2018年から行政や関係機関による議論が本格的に始まり、2019年8月に「3.11伝承ロード推進機構」が発足し、東日本大震災の教訓伝承による防災力の向上と被災地の地域振興を柱に活動を展開しています。各地の震災伝承施設で、地域建設業が行った道路啓開や



#### 千葉 嘉春氏

一般社団法人  
宮城県建設業協会 会長

震災時には、宮城県建設業協会専務理事として震災対応に奔走し、2016年5月から現職。同年6月からは東北建設業協会連合会会長も務める。大郷町出身。

ご遺体の埋葬などの想像が及びもつかないような災害対応についても皆さんにきちんと伝え、震災の教訓を地域に持ち帰っていただきたい。それが、「3,11伝承ロード」の役割だと考えています。



\*のちに2021年3月6日開通と発表された。

## 防災知識に関する伝承の大切さを 共有していきたい(今村氏)



写真上:令和元年東日本台風の豪雨で浸水した丸森町中心部。かつてない甚大な被害は、東日本広域に及んだ(2019年10月14日撮影)  
写真下:角田市内農場での高病原性鳥インフルエンザ防疫措置としての埋却作業を実施(2021年1月21日撮影)

## 2 地域の安心・安全を守るための取り組み

**千葉** 近年、大規模な自然災害や多様な災害が頻発しています。そうした中、地域建設業は、2015年の関東・東北豪雨災害をはじめ、台風、豪雨、豪雪などのさまざまな災害への対応を行っています。令和元年東日本台風では、東北地方を中心に記録的な大雨となり、被害の大きかった丸森町では堤防の上を水が流れるという状況になりました。鳴瀬川水系吉田川や阿武隈川水系新川、内川、五福川の堤防決壊に対し、災害協定に基づく要請により当協会は

員企業は24時間体制で応急復旧を行い、2週間で任務を完了しました。

**今村** 自然災害が激甚化していますが、今、防災の定義の対象が自然災害だけでなく、例えば、感染症など社会災害にまで広がっています。そうした災害に対して事前にきちんと学んで意識化しておくことで、対応できることはたくさんあります。

**千葉** 地域建設業は鳥インフルエンザ、CFS（豚熱）などの家畜伝染病への対応も担っています。2017年に栗原市で発生した高病原性鳥インフルエンザの埋却作業においては、72時間で防疫ミッションを完遂しました。今、CFS（豚熱）の感染拡大も懸念されていますが、こ

## 地域建設業は多様な災害から地元を守る 役目を果たす(千葉氏)



各伝承施設では、語り部やガイドにより、震災の教訓を後世に伝える活動を続けています。写真上:旧大川小学校(2020年9月27日撮影)、写真下:震災遺構中浜小学校(2020年9月26日撮影)

うした家畜伝染病に対し、当協会では、各支部単位で関係機関と連携を図り、事前の確認や実地訓練を重ねております。

**今村** 備えは大事ですね。「3.11伝承ロード推進機構」でも、災害の教訓を知って、備えていただくために、さまざまな震災伝承施設のネットワーク化を図り、ホームページなどを活用し広報活動を行っています。また、「3.11伝承ロード」を学ぶ研修プログラムを提供し、その方の課題に合う地域や施設などを紹介しています。修学旅行でも教育の一環として、震災の伝承施設に訪れていただいています。こうした取り組みは、大変意義があることです。

**千葉** 地域を守るために、地域建設業は多様な



災害に対応できないといけません。いわば、「地域の町医者」としての役割があると思っています。当協会は宮城県の指定地方公共機関であり、日頃から有事に備えています。

**今村** 私たちも防災意識を高める活動を広げていきたいと考えています。まずは、東日本大震災で被災した青森県から福島県の皆さんの活動をネットワーク化し、さらに新潟県中越地震や阪神淡路大震災の被災地域ともつながり、さらにハワイの津波博物館やインド洋津波があったインドネシアなどともネットワークを構築し、グローバルな視点で防災知識に関する伝承の大切さを共有していくことを目指しています。

## 命を守るために、さまざまな機会を通じ、震災を伝承していくことが大事だ(今村氏)

### 3 震災の教訓を後世に伝えるために

**千葉** 少子高齢化が進む中、地域建設業がいざという時の組織力を維持していくには、将来の担い手の確保・育成が課題であり、責務であると実感しています。そのためにも、働き方改革を推進し、魅力ある産業にしていくことが必要です。

**今村** 実は、東日本大震災後に、東北大学でも土木工学を志す学生が増えています。震災を目の当たりにして、若い方も社会インフラの大切さを改めて認識したのではないのでしょうか。こうした若い方のマインドが大事ですね。

**千葉** 若手が生き生きと活躍できる環境への転換が必要だと思っています。コロナ禍にともなう、経済・社会システムに大きな変化をもたらす、5G・人工知能(AI)・クラウド等のさらなる活用による、政府挙げてのデジタル・トランスフォーメーション(DX)の推進がその原



動力として期待されていることから、建設業でも積極的に取り入れていきます。地域建設業は、人々の暮らしがある限り、なくてはならない産業です。将来に向けて、若い方が建設業に魅力を感じる

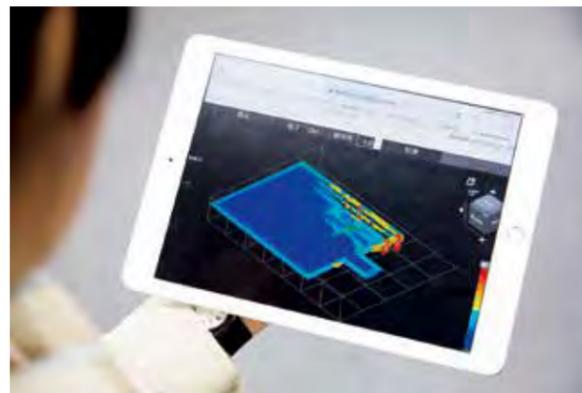
ような工夫や広報活動にも注力しています。

**今村** 安全・安心と同時に、地域の活性化も課題ですが、震災ツーリズムが地域振興の役に立つと思っています。多くの方が被災地の伝承施設を訪れることによって、地域の交流人口が増えます。何度も訪れてくださる方もいるでしょう。豊かな自然や美味しい食事を楽しんだり、歴史や文化を学んだりなどの多彩な交流プログラムの中で、防災を学んでいただければと思っています。

**千葉** 東日本大震災では、改めて地域を守り支え



ICT建機の導入は、工事精度の向上と作業効率化を実現(2019年7月30日撮影)



ICT建機による作業状況は、タブレットなどの情報端末でも確認できる(2019年7月30日撮影)

## 東日本大震災では、地域建設業としての責任を改めて確認した(千葉氏)

るという地域建設業としての強い責任感、役割を確認させていただきました。震災の風化を懸念する声が聞かれますが、当協会としても「3.11伝承ロード推進機構」と連携し、伝承施設を訪れ、語り部の話を聞くなどの体験を通じ、建設業の視点で震災について発信していく考えです。

**今村** 防災意識社会の構築において、自助共助という点から、それぞれが防災を学び、対応でき



宮城県建設業協会会員企業の社員らが参加し実施された「伝承ロード研修会」(2020年11月19日撮影)

ることが一番重要なことです。一方で、我々がいかに努力しても、避難できる安全な場所がなければどうしようもありません。公助として、インフラがきちんと整備されていることが必要です。地域建設業にはそうした国土強靱化への役割を期待しています。自分や家族の命を守るためにはどうすべきかを考えると、伝承の大切さが理解できます。さまざまな機会を通じ、震災を学び、その教訓を多くの人に伝え継いでほしいと願っています。

対談は、新型コロナウイルス感染防止対策を徹底し実施。対談終了後にマスクを外し顔写真の撮影を行いました。



「今できることプロジェクト」のバスツアーで訪れた震災遺構荒浜小学校(2020年11月14日撮影)



東日本大震災の被災地支援・被災者支援のあり方をともに考え、具体的なアクションにつなげることを目的に、河北新報社が2012年度にスタートした取り組みで、宮城県建設業協会も当初から同プロジェクトに賛同し参画している



東日本大震災から10年。

地域建設業は、

地震・津波だけでなく、豪雨、豪雪など

頻発化する大規模自然災害から、

人々の命と暮らしを守ってきた。

これからも、地域建設業は、

震災からの復旧・復興を担いながら、

地域の社会インフラをつくり、

未来への投資となる国土強靱化を進め、

次代につなげるための維持管理を続け、

人々の安全・安心を支えていく。

このまちは自分たちで守るという使命感と、

あの震災を忘れないという思いを胸に。

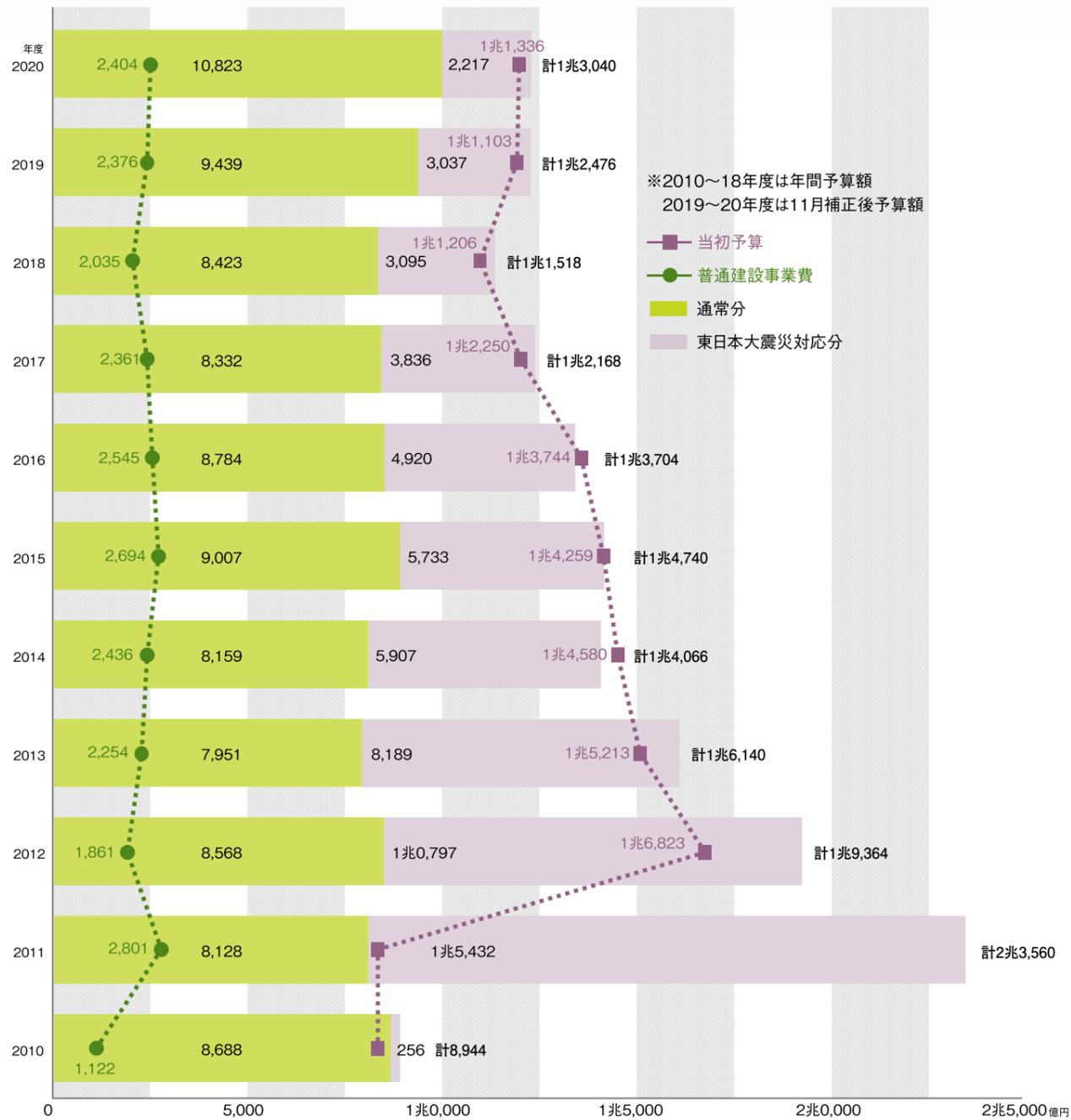
#### 震災遺構 荒浜小学校

被災の痕跡を鮮明に残す校舎と震災直後の記録が、津波の脅威を伝える。震災の教訓を伝承する施設として、仙台市により整備された。同様の遺構は東北の沿岸4県に複数整備され、「伝承ロード」としてつながる(2020年11月4日撮影)

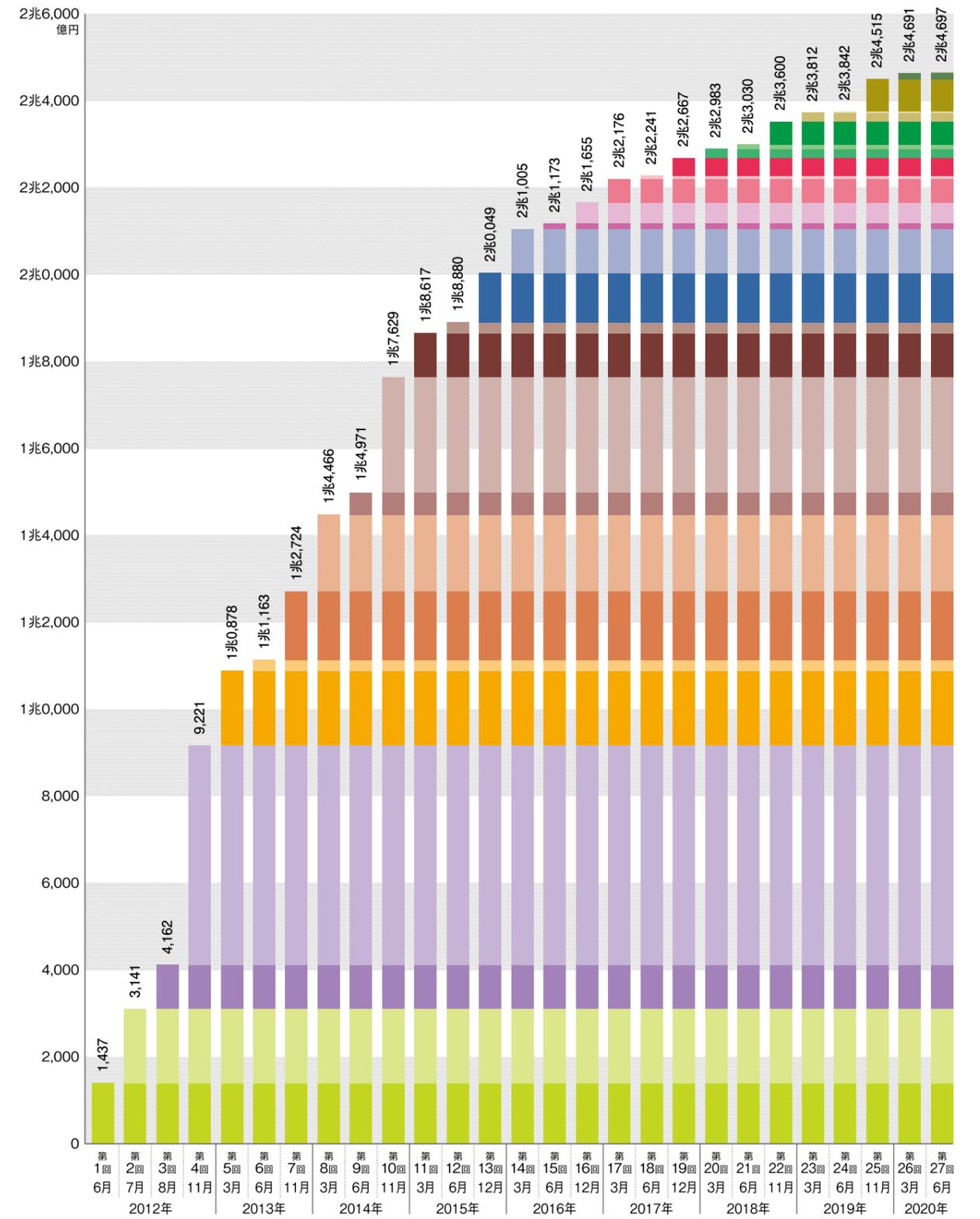
# 資料編

## 東日本大震災からの復旧・復興を支えた 宮城県予算と復興交付金

### 宮城県の予算額の推移 (一般会計 2020年11月末現在)

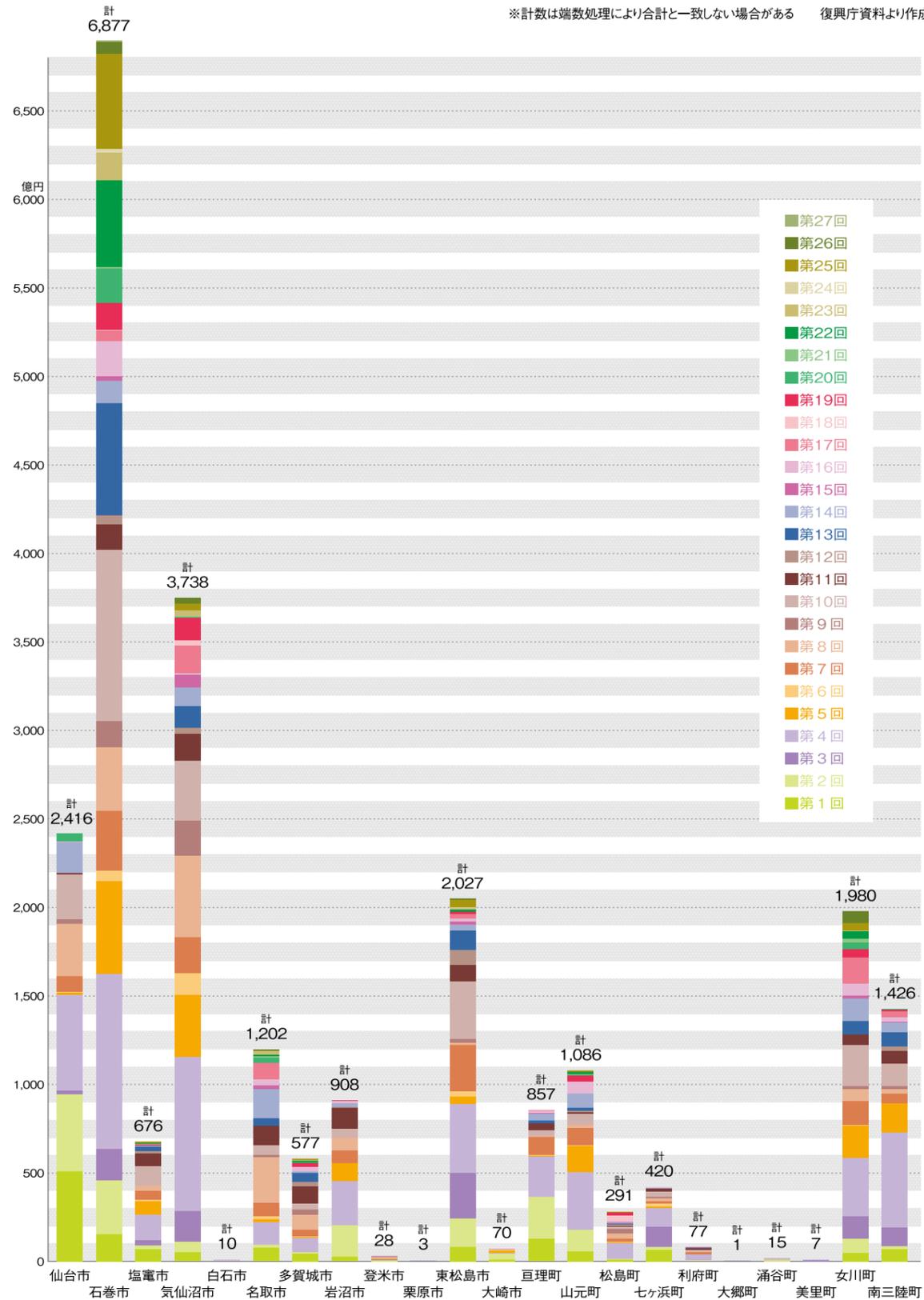


### 宮城県への復興交付金の交付可能額 (事業費)



### 宮城県内自治体への復興交付金の交付可能額 (事業費)

※計数は端数処理により合計と一致しない場合がある 復興庁資料より作成



### 宮城県における防潮堤災害復旧・復興の進捗状況

宮城県では、復旧・復興事業を実施している  
369箇所の内、約7割の255箇所まで完成済み。



海岸堤防(防潮堤)の復旧・復興状況について (2020年12月末)

区分	事業者	復旧・復興計画		箇所完了	
		箇所数	延長 km	箇所数	延長 km
農地海岸	国・県	98	26.2	98	26.2
漁港海岸	国・県・市・町	145	79.6	62	28.0
建設海岸	国・県	66	61.9	53	50.9
港湾海岸	県	37	52.6	21	19.9
治山	国・県	23	13.5	21	12.5
合計		369	233.8	255	137.5



未来のために 震災を忘れない  
3.11 東日本大震災  
宮城県建設業協会の闘い 9

---

令和3(2021)年2月

発行 一般社団法人 宮城県建設業協会  
〒980-0824  
仙台市青葉区支倉町2番48号  
宮城県建設産業会館6階  
電話 022-262-2211 FAX 022-263-7059  
E-mail [jigyo@miyakenkyo.or.jp](mailto:jigyo@miyakenkyo.or.jp)  
URL <http://www.miyakenkyo.or.jp>

編集・制作 河北新報社